

伊能忠敬

研究

史料と伊能図

二〇一三年 第六九号



伊能大図151号部分 丸亀附近
この画像は表紙画像左上部分に接続

伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.69 2013

伊能大図146号高松附近と

伊能大図151号部分丸亀付近

(アメリカ議会図書館蔵模写図に彩色)

表紙図は伊能大図151号の丸亀付近と146号高松付近で、宇多津から阿波国境までが、ほぼ高松藩領である。

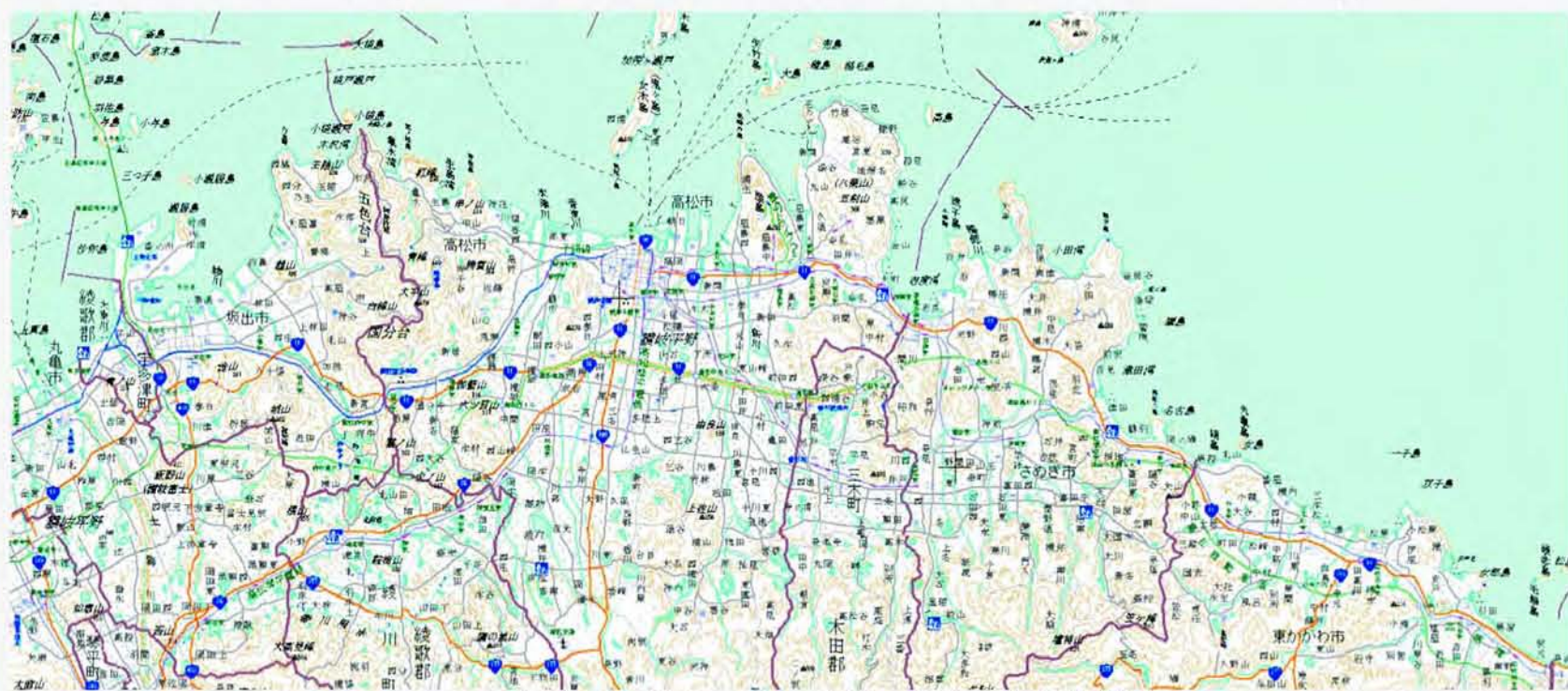
本図は、アメリカ議会図書館の無着色の大図模写図の水面に水色、山岳部には黒線で描かれた稜線に沿って、国会図書館蔵の模写図と同様な彩色を施した復元図である。

高松城は近世の海城としては、最初で最大の例で「讃州さぬきは高松さまの、城が見えます波の上」と謡われたというが、城全体が海中に突出した様子が、伊能図でもはっきり描かれている。

現在では、すっかり市街の中になってしまったが、三重櫓や門など一部の建物と一部の石垣、堀が残っており「玉藻公園」として整備されている。外堀と内堀には海水が引き込まれており、往時の名残を残して、堀には牡蠣などの貝類が生息し、養殖の鯛も放流されているという。讃岐には15万石の高松藩と5万石の丸亀藩、その支藩で1万石の多度津藩が置かれた。

高松藩は水戸徳川家の支藩で溜間詰という高い家格を持っていたが、測量日記を読むと物凄く丁寧な伊能隊に接している。

渡辺一郎(表紙題字は伊能忠敬の筆跡)



国土地理院「電子国土」丸亀、高松、宇多津附近

目次

69号

グラビア

●伊能図の旅

大図一〇九号より 野麦峠

大図二五号より 襟裳岬

大図二二六号より 三河湾東部

星埜 由尚 1

話題

●史料解説

桜井秀蔵あて伊能忠敬書簡

伊能 楯雄 6

コラム 伊能忠敬と桜井秀蔵

伊能測量現地史料紹介⑩

高松藩 久米栄左衛門 伊能測量覚

文化五年 測量方一件記録 伊藤 栄子・渡辺 一郎 10

窪谷婦人妙真のこと 窪谷 悌二郎 19

コラム 仙台藩蔵屋敷と潮来の繁栄

伊能忠敬周辺の女性の手紙 加藤 時男 25

「小島一仁先生古文書講座の資料から」

コラム 伊能隊と飲酒

●忠敬談話室

山武歳時記(二)

「九十九里田中荒生で復活した「虫送り」」 江口 俊子 29

伊能測量漫筆三 渡辺 一郎 30

唐津藩の伊能図に関するメモ 編集部 31

安倍首相成長戦略の記者会見で伊能忠敬に触れる 編集部 30

コラム あれ? 弯架羅針がない? 編集部 31

異色の新会員紹介 編集部 32

箱田良助の子孫・榎本隆充さん 渡辺 一郎 34

榎本武揚文書に出会う 伊藤 栄子 35

会報六八号の「先触れ」の写しに誤記を発見より 伊藤 栄子 35

コラム 「伊能図大全」の刊行決定

●資料 「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第六回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版 渡辺 一郎監修・井上辰男編著 36

●ニュース・お知らせ

各地のニュース・新入会員紹介・会員便りほか 編集部 45

表紙解説 渡辺一郎(表紙裏)

野麦峠

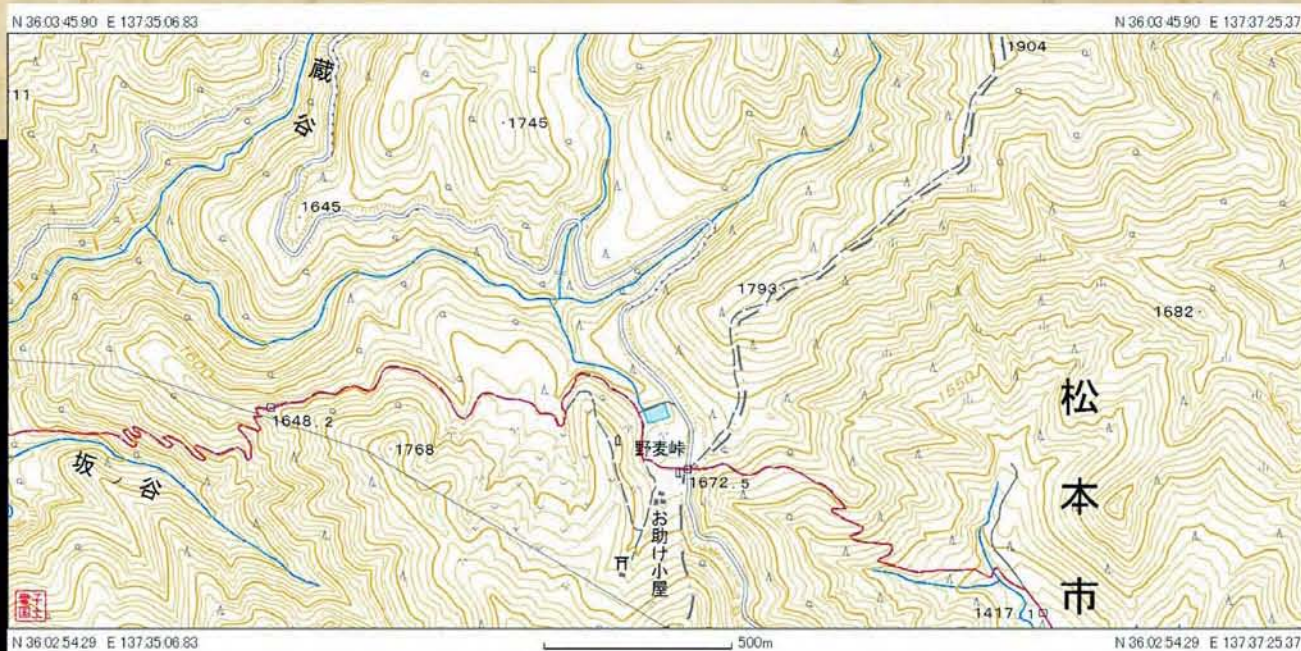
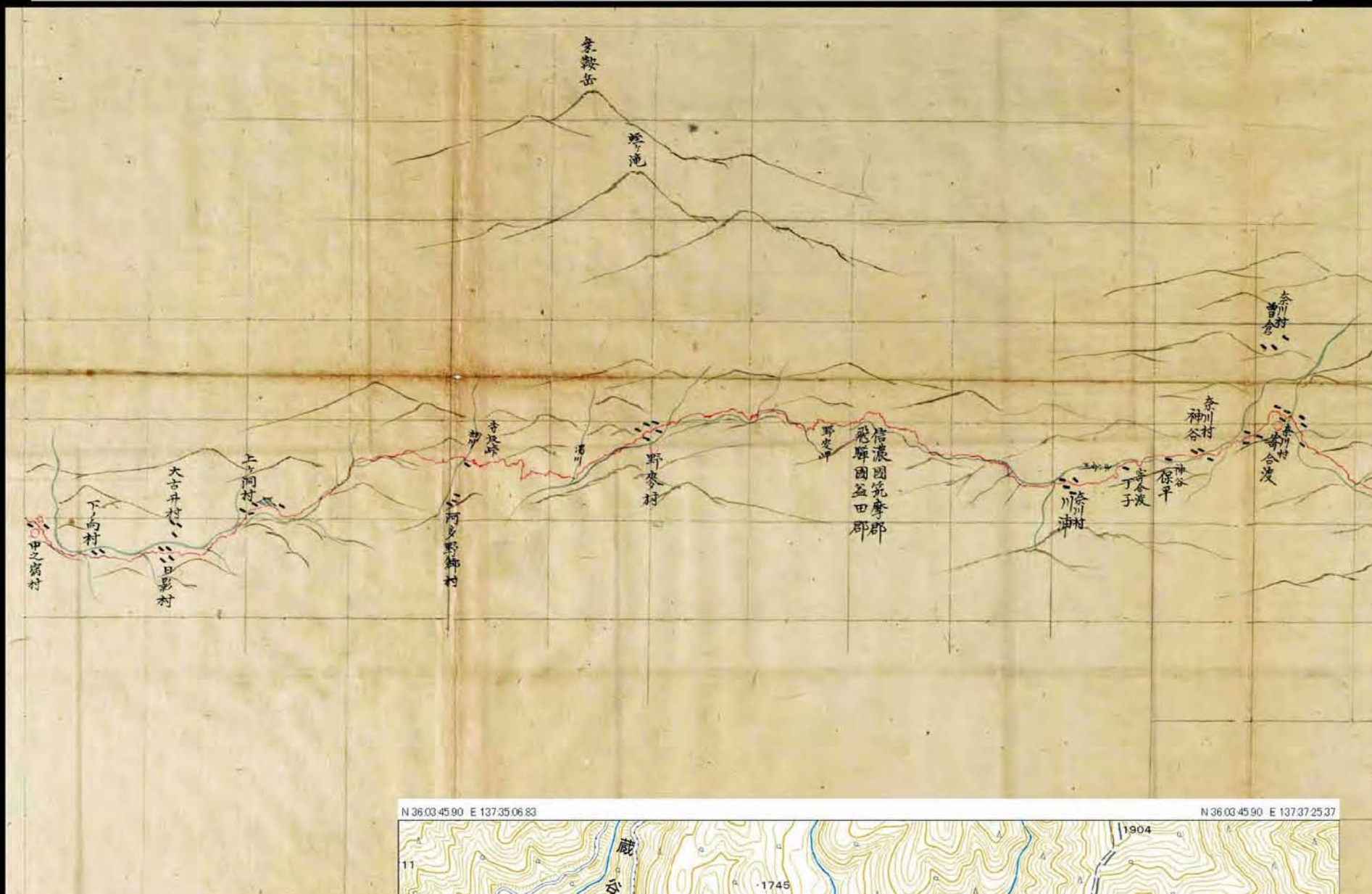
野麦峠

女工哀史で有名な野麦峠は、飛騨から信濃に抜ける街道が通っている。峠の標高は、一六七二・五mで日本一高い水準点が置かれている。伊能測量隊は、第八次測量においてこの峠を越えた。伊能測量においても最高地点となっていた。野麦峠は、飛騨と信濃の国境であり、現在も岐阜県と長野県の県境となっている。現在の県境は峠の分水界となっており、測量日記には、国境は野麦峠から少し下ったところであると記し、大図上でも飛騨国益田郡と信濃国筑摩郡の境は野麦峠に東に注記されている。

地形図を見ると、野麦峠を越える自動車道と別に水準点が置かれている徒歩道がある。この水準点は、明治三六年に設置されたもので、この道は、旧野麦街道と言われている。伊能測量当時、野麦街道の位置が明治三六年当時と同じであったか明らかではないが、大きくは変わらないであろう。おそらく伊能測量隊は、現在地形図に見られる徒歩道を測量して行ったものと考えられる。

大図を見ると、野麦村から野麦峠まで測線に沿って川が描かれ、数回にわたって測線が渡っている。測量日記によると、野麦村から蛭ヶ谷沢の長さ九間の板橋と戸沢谷の小流を渉ったことが記されているが、その他の徒歩道については記載がない。往時の野麦街道は、谷に沿った道ではなく、谷壁斜面の上部を横切っていく道である。谷壁斜面を刻む沢はあるが小流である。

第八次測量の日記を読むと、川を渡る橋についてその種類、長さなどについて詳しく記載されている。このことから判断して、蛭ヶ谷沢以外橋はなかったのだから、大図に描かれた野麦街道に沿う川は、もとも大図作成時に誤って描かれたか、陸軍模写したときに誤ったか、いずれにしても野麦街道の遙か下を流れていたものを誤って描いたと考えられる。陸軍模写の大図には青線でもって河川が描かれているが、山景の模写も含めてその正確さには疑問がある。



伊能大図第109号野麦峠の部分
(アメリカ議会図書館)

右図：国土地理院電子国土
野麦峠への測線重ね図
東京カートグラフィック(株)
猪原絃太氏による
赤点線が測線

襟裳岬

襟裳岬

寛政一二年の第一次測量において、蝦夷地の南半の海岸を測量したが、いくつかの区間で海岸線を測量できなかった。そのひとつが襟裳岬である。測量日記によれば、伊能測量隊は、ホロイツミ（幌泉、現在のえりも町中心市街地）から山越えし、サルル（猿留）に抜けている。日高から十勝への海岸は、名だたる難所として有名で、急峻な海蝕崖が迫り、当時の測量隊の陣容では、海岸線の測量は難しかったのである。十勝側の国道は、その整備に黄金を敷き詰めるほどの経費がかかった道路という意味で黄金道路と呼ばれているほどである。伊能測量隊は、東蝦夷地の幕府直轄化後に開削された猿留山道を通った。第一次測量後に作成された蝦夷図（国立公文書館所蔵）には、この測線が描かれている。ところが、最終成果の写本であるアメリカ議会図書館所蔵の大図を見ると、測線は海岸線を描いており、襟裳岬を廻っている。一方、猿留山道を通った第一次測量の成果は全く描かれていない。測量日記によれば、寛政一二年七月二日シヤマニ（様似）を出発した伊能測量隊は、アイヌの案内人をつけて険阻な海岸線を測量し、ようやくのことでホロイツミに到着した。この時は、日が暮れ、ホロイツミからの迎えの提灯の明かりを見たときには、「地獄に仏」とはこのことだと書いてある。地形図を見ると、この間は、海蝕崖が迫り、測量日記の記載も実感を持って理解することができる。



伊能大図第25号襟裳岬の部分（アメリカ議会図書館）
 上図は松前距離蝦夷行程測量分図（国立公文書館）
 右図は国土地理院電子国土襟裳岬への測線重ね図、青点線が測線
 （東京カートグラフィック株式会社猪原紘太氏による）



三河湾東部

三河湾

豊橋を中心とした三河湾奥の地域は、トヨタ自動車をはじめとする大工場が立地する埋め立て地が広がっている。このような人工の海岸線からは想像できない大きな砂州が伊能大図には描かれている。水中州と書かれた砂嘴が牟呂村の辺りから西南西の方向に細長く延び、波瀬村の沖まで達して、城下町田原が面する湾（現在の田原湾）を形作っている。湾のなかには、波瀬村から突出する二つの砂嘴が描かれ、湾内には大きな砂州が描かれている。

この海岸線は、第四次測量において測られている。伊能測量隊は、享和三年四月七日田原城下に入り、十日に田原城下出立、牟呂村に止宿して十一日に吉田城下（現在の豊橋）に到着し、十四日に吉田城下を出立して三河湾の海岸を測進している。この間の測量日記には、水中州ほかの砂州についての記載は全くない。また、波瀬村から突出する砂嘴は、先端まで測線が行き届いており、このような形態の砂州であったことは明確である。しかし、水中州と湾内の砂州については、その輪郭が描かれているが測線はなく、遠望してその姿を捉え描いたものであろう。従って、その形についての精度は低いと言わざるを得ないが、伊能図には実見したものしか描かれていないという原則から見ると、少なくともその輪郭が描かれた砂嘴及び砂州が存在したことは間違いない。

現在これらの砂嘴・砂州を実見することはできず、埋め立て等により地形は大きく変わっており、工場敷地となっているところは往時の姿を想像することもできない。ただ、地形図を見ると、牟呂村の砂嘴の付け根の部分と考えられる干拓地（この干拓地は、明治時代の地形図では水田となっており、現在も水田地帯である。）には、牟呂から水中州の方向に高まりのあることが等高線から読み取ることができる。



伊能大図116号三河湾の部分（アメリカ議会図書館）
 下左：国土地理院電子国土三河湾東部への測線重ね図
 東京カーグラフィック（株）猪原絃太氏による
 赤点線が測線
 下右：三河湾東部明治23年測図2万分の1地形図

史料解説

桜井秀蔵あて伊能忠敬書簡

伊能 楯 雄

私の手元に大谷亮吉の「伊能忠敬」がある。この本は祖父の甲之助が、大正五年に日本学士院から贈呈されたもので、送り状には「伊能忠敬翁測地事蹟の調査につき兼ねて多大の便宜を與へられし候段深謝の至り」とある(図1)。

そして、その五年前の明治四四年五月に発行された「偉人伊能忠敬」(大谷亮吉、海塩錦衛監修・加瀬宗太郎記述)の序文(図2)には、次のように書かれており、地元佐原での大谷の調査の様子が窺い知れる。

「(明治)四一年の夏、東京より帝国学士院嘱託員大谷理学士佐原町に出張せられ、親しく伊能先生の事蹟を調査せられるに及び同家の秘蔵に係る先生の遺物は挙げて閲覧考証されたる而已ならず、進而当時伊能家に関係ありたる緒家を歴訪して遺物の搜索は勿論普く事蹟を渉獵調査したる」

私の家(伊能七郎右衛門)は、忠敬の家(伊能

伊能甲之助殿

拝啓本院。於先伊能忠敬翁測地事蹟調査ニシテ兼テ多大ノ便宜ヲ與ヘラセタマハシメ深謝ノ至リ
三ノ今般右調査終了出版ノ運ニ相至リ製本出来タリ付同製本一部別便ヲ以テ贈呈致ス
間御受納被下度也
大正六年九月六日 帝國學士院

図1 帝国学士院の礼状

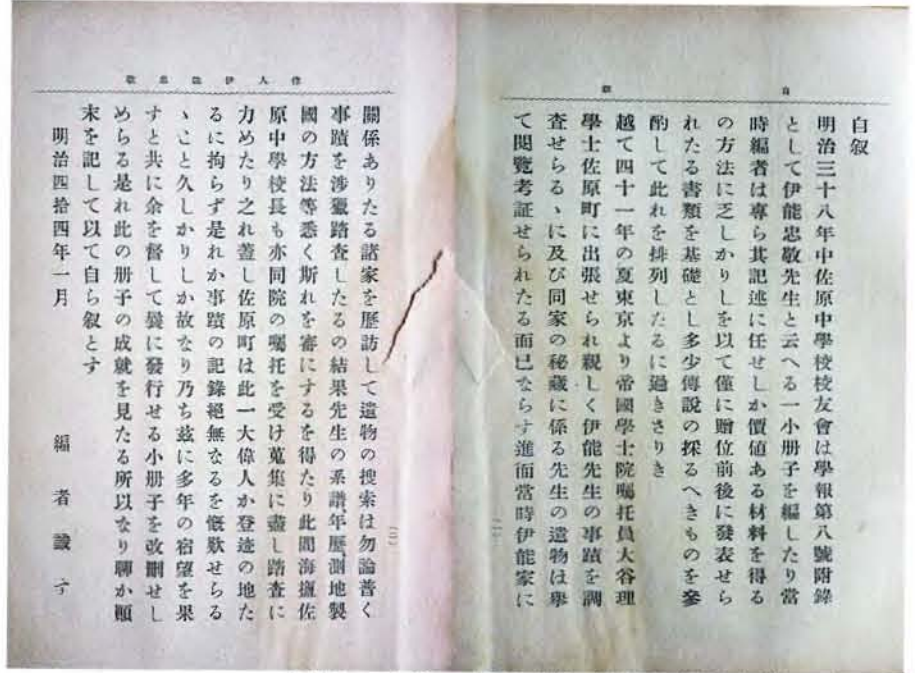


図2 大谷・梅塩監修「偉人伊能忠敬」序文

三郎右衛門家)の分家であり、祖父甲之助の四代前が大谷の「伊能忠敬」文中に出てくる伊能豊秋であることから、我が家への大谷の来訪は十分考えうることである。

まず、文中にたびたび引用される「豊秋日記」は、忠敬婿入前後の様子を知るうえで、当時の関係資料が数少ない中、十分調査に役立てられたことと思う。

また、文中に「七郎右衛門方口碑」と補筆された部分がある。

例えば、「伝うる処によれば忠敬は嘗て医たらんと欲し其術を修めたることあり。その伊能家に入る頃は常陸・土浦辺に於いて修学し居りたりと。」

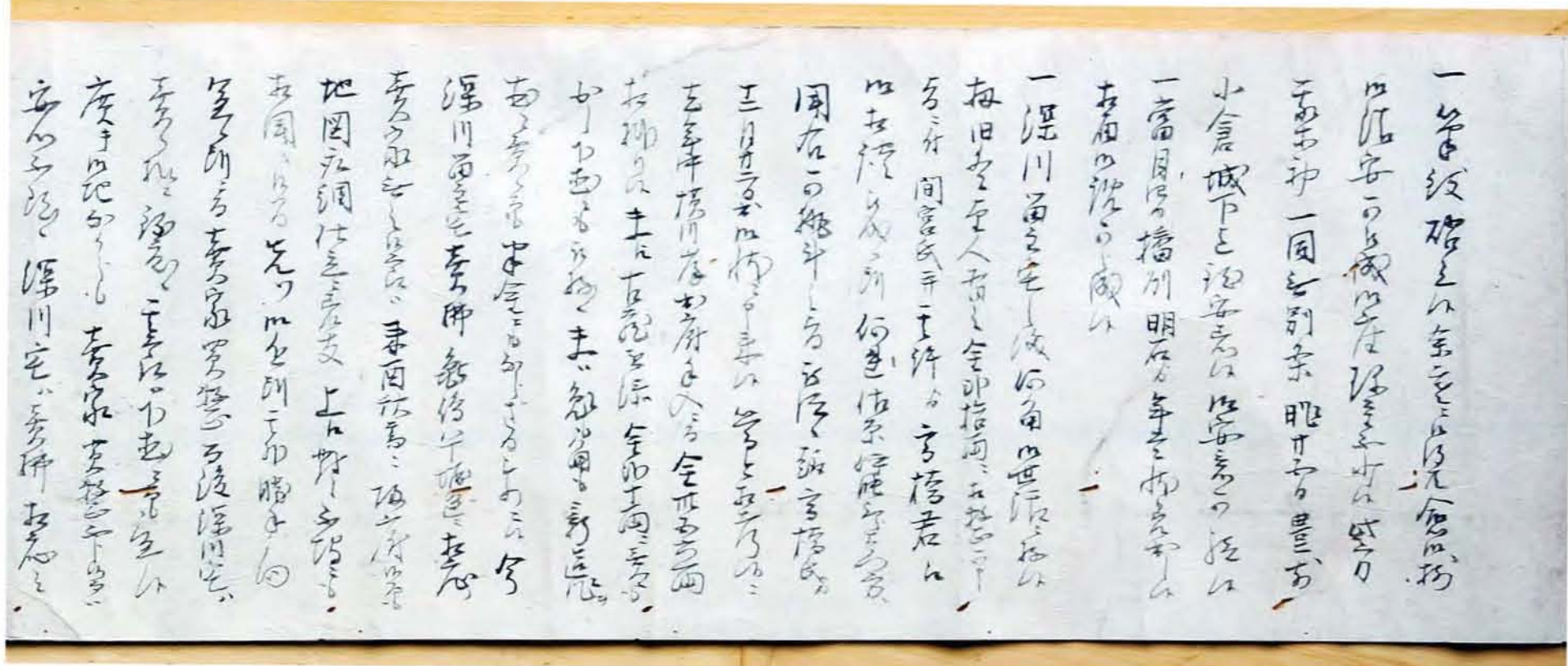


図4 桜井秀蔵あて伊能忠敬書簡(文化9年1月26日付け)

これらは、祖父と大谷との対話の中から出てきたものなのであろう。

さて、桜井秀蔵あて忠敬書簡に関しては、大谷本中に次の記述がある(図3)。

「是より先深川黒江町の住宅狭隘にして地圖作成上不便を感じること尠なからざるを以て、文化七年の末、高橋景保の盡力により曆局内に邸宅を新築するの議略成しも遂に実現するに至らず。九州地方へ第二次の出張中桜井秀蔵及其他二三の者に邸宅の選定を依頼したるも又意に満つるものを得ざりき。(文化九年春忠敬より桜井秀蔵に與へたる数通の書簡 伊能甲之助蔵等による。)」

この文中の伊能甲之助蔵の書簡は、次の四通であり、今も私の家に残されている。

- ① 文化九年一月二日付け 西宮から
- ② 文化九年一月二六日付け 小倉から
- ③ 文化九年三月五日付け 鹿児島から
- ④ 文化一〇年三月七日付け 平戸領大島神ノ浦から

この四通は、二年半に及んだ九州第二次測量(文化八年十一月から同一年五月)の間に書かれている。忠敬の江戸帰着は五月二二日であるが、この直前の同年三月二日付け、三月二一日付け及び四月二五日付けの妙薫・りて宛て書簡でも、まだ転居先は決まらず、深川宅の手入れ畳繕いを指示しているような状況にあったのである。

しかし、帰府の翌々日の五月二四日に、忠敬は「八丁堀亀島、桑原隆朝明屋敷へ参り一覽、家内普請手入等の指図」(忠敬江戸日記)をしており、六月三日には引越しを終わっている。二次測量出立のときから望んでいた亀島辺への転居は、帰府間際になって急に決まったことになる。

当時の桑原家は、ノブの弟の如則、すなわち忠敬の義弟が当主である。祖父の代、父隆朝養純(文化七年没)の代は日本橋元大工町に居住していたのだが、その後八丁堀の与力屋敷に移り住み、ふたたび他所へ移転した。そして其跡へ忠敬が住居を構えることになったのである。

借地の面積は一五〇坪、八丁堀では与力一人三〇〇坪ずつ宅地をもらっていたといわれており(三田村篤魚・武家事典)、

(十五) 地圖の整理及江戸府内街道繋測

是より先深川黒江町の住宅狭隘にして地圖製作上不便を感じること尠なざるを以て文化七年(一八〇〇)の末高橋景保の盡力により曆局内に邸宅を新築するの議略成りしも文化八年正月十八日附書簡より伊能甲之助蔵等による。遂に實現するに至らず九州地方へ第二次の出張中桜井秀蔵・伊能甲之助蔵・伊能忠敬及其他二三の者に邸宅の選定を依頼したるも又意に満つるものを得

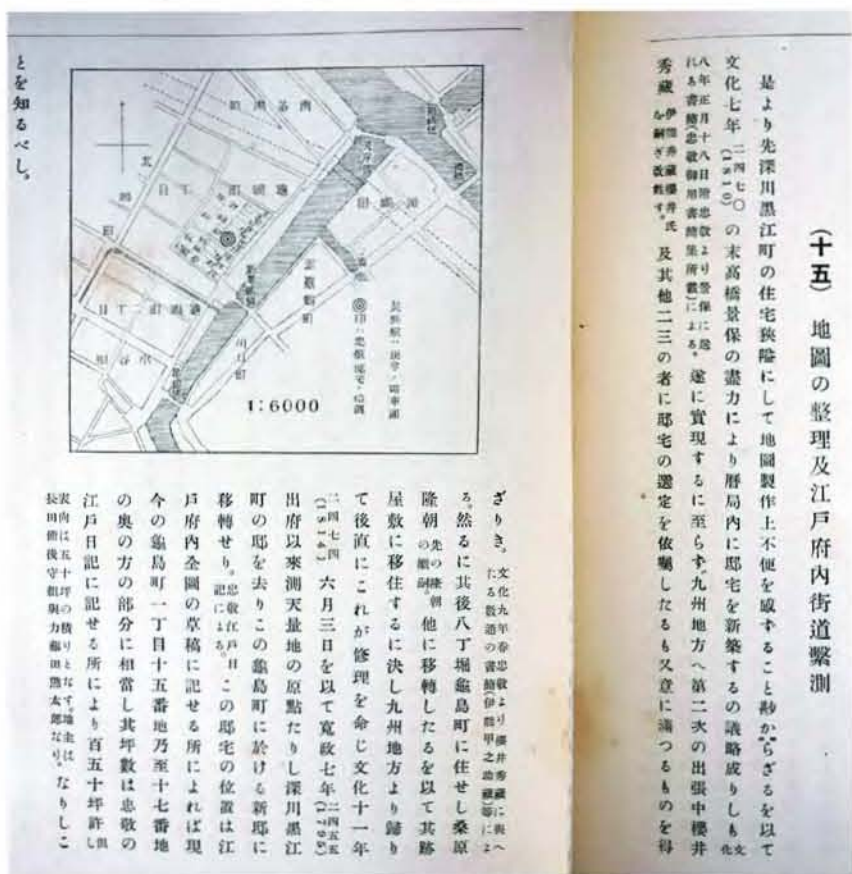
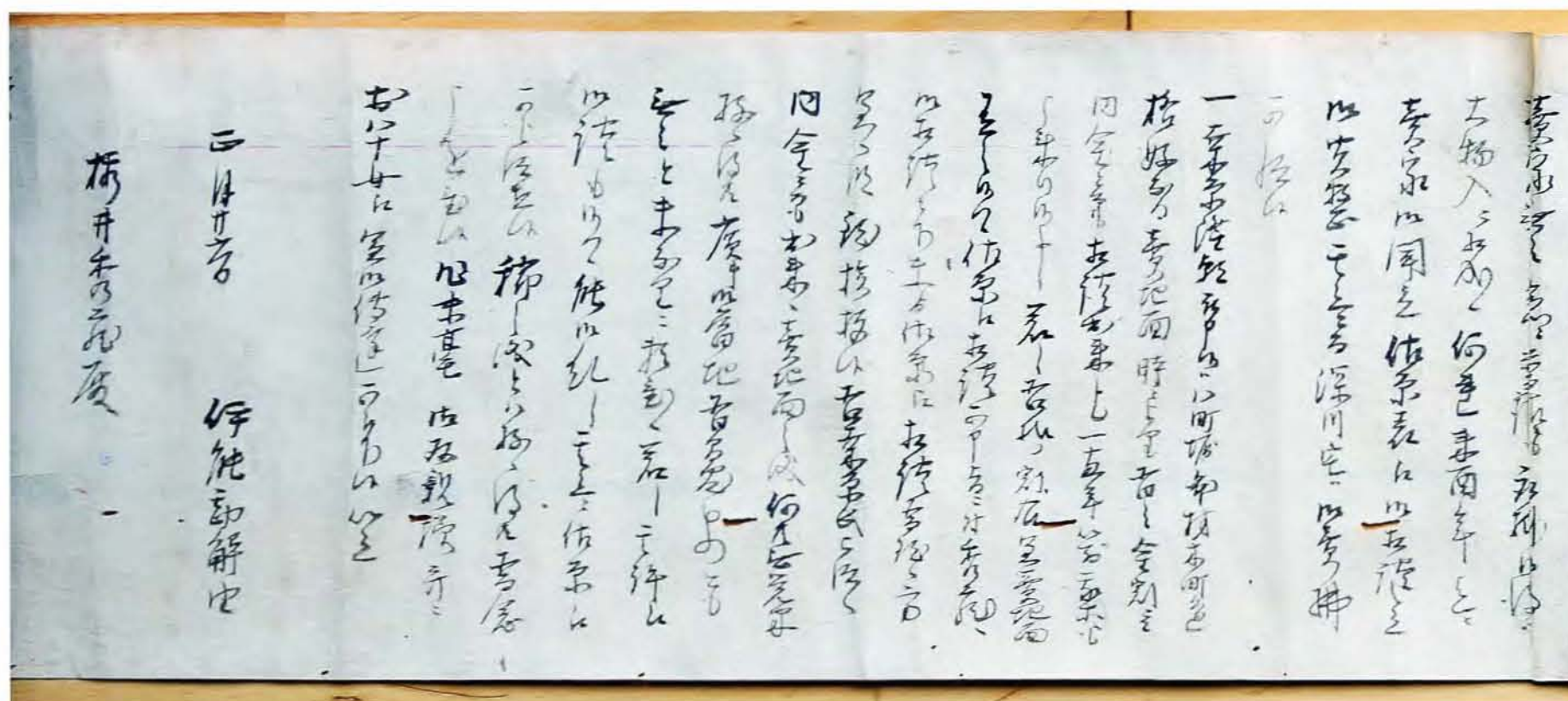


図3 大谷亮吉「伊能忠敬」亀島移転の記述



その半分を借り受けたことになる。地代は月一兩、黒江町は年四兩であったので、相場の違いはあるとしても三倍に増えた。

前述の四通の書簡のうち②の、文化九年一月二六日付け小倉からの書簡の文中に次の記述がある。

「桑原隆朝申され候は 八丁堀本材木町辺に格好なる売地面時により之有り 金割にて内金にても相談出来申し候 一兩年以前我等へも申し来たり候よし 若し右様の割合宜売地面之有り候はば佐原へ相談申すべき旨につき 秀蔵へ御相談下され夫より佐原へ相談致させ候方宜候段 挨拶致し候 桑原氏仰せられ候内金にても出来候売地面の儀 何共覚束無き様候え共 広き御当地有間敷ものとも之無くと 夫なりに頼置候 若し其許へ御談も候はば能く糺し 其上に佐原へ仰せられべく候 稀の儀とは存ぜられ候へども 念の為申進置き候」

忠敬の亀島辺移転は、九州二次測量の後、黒江町の家では手狭になること、三年後には手入れが必要になり費用も掛かること、深川の地は所属する小普請組の支配や組頭、佐原の地頭津田家、天文方直属上司である堀田摂津守等との連絡には少々不便であったことなど考えた時、切実な問題であったことだろう。この書簡には、隆朝の言葉を頼りとし、又なかば諦めながらも、わずかな期待をすてきれない、忠敬の気持ち表れているように思われる。

余談であるが、隆朝如則は八丁堀亀島から何処へ移転したのか。文化十一年の忠敬日記・帰府直

後の五月二七日の記述に「芝新錢座 桑原隆朝宅立寄」とある。この日、早朝から測量中世話になった九州諸大名屋敷へのお礼廻りをしている、その途上のことである。芝新錢座丁は町屋で、その真近の愛宕下には仙台藩上屋敷、中屋敷がある。この時藩主は文化九年に相続したばかりの斉宗公で、この時一九歳、体が弱かったのか五年後に二四歳で亡くなっている。隆朝が治療にあたったといわれる人である。

このようなことをつなぎ合わせてみると、隆朝は忠敬九州測量中の文化九年以後、藩の要請により藩邸近くに住むことになった。そして、その時期は忠敬江戸帰着間際であったと推定できそうである。その後、隆朝やその家族が度々の忠敬宅を訪れているが、ここから亀島までは半里程、あまり往来に無理のない距離にある。

以上、自家に関わること等々を書き連ねましたが、今回は、そのところはさておき、まずは、この書簡文（忠敬の実筆（図4））をお楽しみいただきたいと思っております。

追記 亀島の忠敬宅（地図御用所）は桑原隆朝宅の借用か買取りではないか

忠敬の書簡や日記などをみると、「売地面」、「売家」など土地建物は区別している。九州二次から帰った五月二四日の日記では「桑原隆朝明屋敷」と書かれ、同二九日の日記には「桑原隆朝跡借地の儀：実は百五十坪程の借地に候得共」、また七月三〇日の文章には「当月文地代金壹兩遣」と書かれているところから、与力・藤田熊太郎からは土地のみを借り、建物は隆朝所有のものを借用又は買取り「普請手入」したのではないかとと思われる。

三田村鳶魚の本に、八丁堀の七不思議と言われている中に「儒者医者犬の糞」というのがある。これは与力、同心が拝領した屋敷地を貸地にした。しかし、ここは武家地なので一般の町人は住めない

自然に儒者と医者が集まって住んだと書かれており、貸地は広く行われていたように思われる。

また、「百五十坪の借地」であるが、日記文中の「五」の文字は不鮮明で「八」とも「九」とも見え判別が付き難い。本文では、大谷亮吉本の「百五十坪」としてある。

桜井秀蔵宛て忠敬書簡―読下し文

一筆啓上致し候 余寒に候得共愈御揃御清安御座成され可く珍重少なからず候 此方我等初め一同別条無く 昨廿五日豊前小倉城下迄安着致し候 御安易給ふ可く候

一当月四日播州明石より年首状差出し候相届き御覧成され可く候

一深川留守宅の儀 何角御世話に存じ候 扱旧冬望む人これ有り金貳拾兩に相整申す可き旨につき 間宮氏並びに其許より高橋君へ御相談成され候所 何れ佐原伊能三郎右衛門方へ聞き合わせ執斗らう可きの旨仰せられ候趣 高橋氏より十二月廿二日出御状に申し来り候 篤

と相考へ候に去年中横川岸出府 手入れにて金参拾五六両相掛かり候 夫へ古蔵を添へ金貳十両に売り候も少し下直にも存じられ候 夫は兎も角も新造作を直に売り候ても半金にもならざるものに候 今深川留守宅売払い亀島八丁堀辺に相応の売家これ無き候節は来る酉秋暮に帰府候ても 地図取調べ仕立に差支へ 上に対し不埒にも相聞へ候間 先ず御近所其外勝手向き宜しく候所にて売家買ひ整へて後

深川宅は売り候様に致し度く候 其の節は下直煮ても宜しく候 広き御地ながらも売家買ひ整へ申さず候ては安心いたさず候 深川宅は売払い相応の売家これ無く 急に普請にも取掛かり候得ば大物入りに相成り候 何れ来る酉年迄に売家御聞立て 佐原表へ御相談の上御買ひ整へ其上にて深川宅は御売払ひ給ふ可く候

一桑原隆朝申され候は 八丁堀本材木町辺格好なる売地面 時によりこれ有り 金割にて内金にても相談出来申し候 一兩年以前我等へも申し来り候よし 若し右様の割合宜き売地面これ有り候はば佐原へ相談申可き旨に付き 秀蔵へ御相談下され夫より佐原へ相談致させ候方宜く候段挨拶致し候

右桑原氏仰せられ候内金にても出来候売地面の儀 何共覚束無く存じ候得共 広き御当地有る間敷きものにもこれ無くと夫なりに頼み置き候 若し其許へ御談も候はば能く御礼 其上に佐原へ仰上られ可く候 稀の儀とは存じ候得共念の為申し進置き候 末毫乍らご双親様並びにお八十女へ宜しくご伝達下さる可く候 以上

正月二六日

伊能勘解由

桜井秀蔵 殿

【編集部注】 地図御用所は与力・藤田からの借地に桑原が建てた家を借用又は買取ったのではない。これは新説で賛成です。

また、黒江町の隠宅は、測量日記に出てくる幸七店という住所名から、世間では借家と考えている人が多いようであるが、蔵もある忠敬の持ち家だったことが本状で確認できる。

ここまで書いて、偶然、箱田良助の書状を眺めていたら、第二次測量帰着後、箱田が国元の弟・池田彦四郎にあてた文化十一年五月二五日の書状に、次のような文言が見つかった。

「・・・当月廿二日帰府仕候：伊能先生之屋敷、江戸深江町表川岸二有之候処、此度八丁堀か女島（亀島）にて、医師之家を買調 此節造作中二御座候・・・」
とあるから、桑原隆朝（如則）から買い受けたことがはっきりした。
（渡辺）



深川黒江町付近
（伊能図「江戸府内図」より）

伊能忠敬と桜井秀蔵

本書状に登場する桜井秀蔵は忠敬の二男である。「ヒデゾウ」ではなくて「シユウゾウ」と読む。これは忠敬が「周蔵」と間違つて手紙に書いているから明らかである。浅間山大噴火の年に妻ミチを失ったあと一緒に暮らした内妻との間に天明六年（1786）に生まれた。

第一次測量のとき一四歳で、五五歳の忠敬にしたがつて蝦夷地を踏破し、第六次測量まで従事したが、四国測量の途中で、何があつたかわからないうが大阪から江戸に帰される。

隊員を罷免されたわけで、以後測量に従事していない。何があつたかを、知りたいと思つていますが、まだ記録には出くわさない。

帰府後は隠宅の留守番をしたり、旅先の忠敬の指示で用事をたしている。後に桜井家に養子に入る。この書状はその頃のもの。やがて養子先もしくじつて、隠宅に戻る。

第九次測量隊が伊豆七島へ向かうとき忠敬が、秀蔵はゆかなくてもよいと止めたのを、すぐそこまでと、押して出かけ、品川まで送り、酒を飲んで帰宅する。病中の忠敬は、これを咎めて自宅から追い出す。佐原本宅にも寄せつけるなどという。

江戸と佐原の縁者の間を往来していたが、のち佐原に住んで手習い師匠で生計をたて、世を終わる。観福寺の伊能三郎右衛門家墓地入口の右側に弟子達が建てた立派な墓碑がある。

一四歳のときから現場を走り廻った秀蔵の後年は大變気の毒に思う。有能な若者が大好きだったのは分かるが、波長の合わない者にも、もう少しやりようがあつたのではないか。（W）

伊能測量現地史料紹介⑪
高松藩 久米栄左衛門 伊能測量覚
文化五年 測量方一件記録

解説 伊藤栄子
解説 渡辺一郎

久米栄左衛門 その昔、見渡す限りの塩田が広がっていた四国の坂出市。その塩田開墾の中心になったのは、久米栄左衛門通賢だった。同じ讃岐の平賀源内が亡くなった翌年の一七八〇年大内郷馬宿村（現在の東かがわ市馬宿）で生まれた。子どもころから手先が器用だったという。一九歳のとき、大坂の間重富（はざましげとみ）の門に入り、四年間、算学と天文・地理・測量を学んだ。伊能忠敬と同じに当時の最先端技術を学ぶ。故郷に帰った後、高松藩から測量方を命じられ、オリジナルの測量機器を制作して、伊能測量の一年前に藩内の測量を終えていた。伊能隊を迎えた際は、藩命により伊能隊を案内したが、専門家として他とは少し違った記録を残している。久米の技術レベルは高く、干拓工事や港湾工事も行い、別子銅山の大漏水の修復、遠州新居湊の開削、大坂淀川改修工事の設計なども手がけている。また、史実に残るよりも一〇年以上前にドンドロ付木と呼ばれた国産マッチを発明したという。この記録は数年以上前に、久米氏の史料を集積する坂出市の蒲田共済会博物館でコピーさせていただいたものである。解説は初めてではないかと思う。

以下、栄左衛門の記録を眺めてみよう。この部分は測量作業に必要な人数と作業を円滑に進めるための人材配置上の注意が記されている。状況の記録と共に、参照する人々への参考意見が貴重である。

戊辰秋九月吉辰 丸亀ヨリ鶴足（うた）郡土器（どき）村へ御引移り被来、測量始メ、

一手先ノ棹通シ人夫積リ

一、梵天持 八人

但シ右ノ人夫ハ随分小船ヲ功者（こうしゃ）ニ乗者ニ被仰付候事 陸測量ノ節ハ何人ニテモ指支無御座候得共、最早霜月頃ニモ相成候得バ 西風強ク浪荒ク時節ニ御座候間、余り度々磯辺ヲ上り下り致事甚ニ手間取、御用不弁利ニ御座候間、是非海辺ノ小功者成者ノ事

一、唐縄引 人足六人

但シ達者成物ノ事

一、鍼（ママ）台持 人足壹人

一、半円台持 人夫壹人

但シ箱共 右人夫ハ磯辺並ニ遠山見渡シ案内の者ニ被仰付候事 此人足ハ測量方御役人中ニ始終附添ニ相成ル人足ニ御座候間、測量場所ニテ度々端々遠山見渡トノ御尋御座候間、余人ニテハ差支御座候哉、尤道引（ママ）案内役人御指出被成候テモ是役人計リニテモ遠山見渡スニ不案内ノ儀モ御座候間、是非海辺ニテ被仰付候事

右棹通シ人足合 拾六人、是ハ一手先分

台持ちは測量隊の近くにて色々聞かれるからしつかりした人間がいいと指摘する。その他は人数の覚えである。

船積り覚

一、御召船八挺鯨

壹艘

但シ朝昼止宿ヨリ亦止宿迄 送船ノ積リ

舟測量ノ時計リ入用ノ舟

一、梵天持船

但シ壹艘ニ付水夫四人乗リ

一、縄引船

但シ水夫同断 壹艘

一、縄懸り見繕舟

但シ七十石積舟ノ天摩（伝馬）壹艘ニ随分

一、測量方御役人中

但シ猪牙船家形付水夫四人 召船壹艘

一、歩行板梯子積舟

但シ召船ニ附添臨時御用水夫同断 壹艘

一、明荷（あきに）葛簞

但シ馬五足 八艘 水夫ハ式十式人

一、駕籠

一、長持 一挺 四人

一、挟箱

一、笈荷 二人 式荷

一、総荷物送り

一、柳ごり 馬五足 人五十

一、天文道具

一、刀箱 式包 二人

一、琉球包

四ツ 二人

伊能忠敬氏高松ヨリ書状御差出シ被成候表書写

江戸浅草御蔵前片町

頒曆御用所高橋作右（ママ左）衛門殿御役所

伊能勘解由

伊能氏荷物覚

小道具

- 一、荷台 三ツ分位 人足六人
- 一、葛籠様物 七ツ 人足拾四人
- 一、長持 壺棹 人足四人

同心中 荷物覚

- 一、葛籠 四ツ 人足八人

小道具

- 一、荷台 二ツ分位 人足四人
- 一、挾箱 二荷 人足二人

右の通御座候覚

ここから内容が変わって、村と村の間の距離となる。棹取りが読みあげるデータを近くで聞いて書きあげたのであろうか。測量が終わって宿舎までの往来、また、先手の測量開始地点までの移動に駕籠、船が使われたことが分かる。駕籠は多分お頭だけだったろう。

丸亀ヨリ引移り

鵜足郡

一、宇多津御止宿

先手止宿ヨリ直ニ駕籠ニテ阿野(あやの)北坂出村江尻村境迄往来筋御通行、同所ヨリ量始メ

- 一、江尻村 拾五丁拾九間半
 - 一、林田村 貳拾五丁四拾四間半
 - 一、鷹屋村 〇四丁四拾六間三合
 - 一、青海村 貳拾九丁拾間三合
- 道程メ式里三丁少シ戻り

青海(おうみ)村ノ内大藪(おおやぶ)村御止宿

同日

後手ハ宇多津御止宿ヨリ国境土器村へ御戻り土器川ヨリ量始メ

- 一、土器村 拾貳丁参拾三間半
 - 一、鵜足津村 貳拾四丁〇拾五間四合
 - 阿野北
 - 一、御供所(ごぶしよ)村 拾六丁〇拾四間六合
 - 一、坂出村 貳拾三丁三拾四間三合
- 道程メ式里〇四丁拾六間
- 是ヨリ大藪村御止宿迄駕籠路御座候

阿野(あやの)北

一、大藪村御止宿

先手ハ止宿ヨリ直ニ香川郡境驚水迄舟ニテ御通行郡境ヨリ量始メ

- 一、笠井村ノ内亀水(たるみ)村 三拾八丁五拾間余
- 一、同村ノ内生島(いくしま) 貳拾四丁四拾五間

道程メ壺里貳拾七丁三拾五間余
但シ右里ハ生島塩浜南橋詰迄

同日

後手ハ止宿ヨリ直ニ乃生(のう)村境迄御通行、同所ヨリ量始メ

- 一、乃生村 三拾三丁五拾間余
 - 一、木沢村 貳拾四丁四拾七間余
- 道程メ壺里貳拾貳丁三拾八間余
是ヨリ止宿迄舟路通行

香川郡西

一、笠井村ノ内生島村止宿

先手ハ止宿ヨリ直ニ香川郡西東ノ境郷東川迄舟駕籠見合ニテ御通行、尚又西東郡境ヨリ量始メ
是ヨリ城下入口迄八丁余

- 一、郷東(ごうとう)村 八丁〇拾三間余
- 一、西浜村 貳拾六丁貳拾壺間余
- 一、東浜村 貳拾〇丁三拾三間余
- 一、沖松島村 拾四丁拾七間

道程メ壺里三拾三丁〇五間余

同日

後手ハ止宿ヨリ量始メ

- 笠井村ノ内
 - 一、生島村
 - 一、香西(こうざい)村
- 道程メ壺里貳拾九丁三拾八間
是ヨリ駕籠ニテ止宿迄御通行
- 一、御城下止宿

先手ハ止宿ヨリ駕ニテ山田郡瀧元(かたもと)村相引橋迄往来筋御通行、同所量始メ

一、西瀧元村
同村ノ内

- 一、浦生(うろ)村
 - 一、屋島村 四拾七丁三間余
- 但シ長崎ヨリ藤めばし迄

後手ハ山田郡冷川ヨリ量始メ、屋島南裏ヨリ打廻り、屋島壇野浦ニテ前後量合終ル

是ヨリ止宿牟礼（むれ）村

後手ノ村順道覚

一、木多村 拾丁三拾八間余

一、春日村 拾丁三拾三間

是ヨリ式丁三拾間ハ相引橋也

一、西瀉元村

一、東瀉元村 拾三丁四拾六間

一、古高松村 三丁の五間

一、屋島村 拾壹丁四拾壹間

但シ古高松境ヨリ藤目ばし迄

式手ノ道程合四里の七丁式拾七間

三木郡

一、牟礼村止宿 是ヨリ一手ハ安治沖大島渡海也

一、牟礼村 拾九丁参拾壹間余

一、安治村 九拾丁五拾四間余觀音端迄

郡境ヨリ安治人家入口、安治ばし迄四拾六丁

式拾七間

一、安治止宿迄道程壹里三拾丁余

同所島々

一、大島周辺 四拾九丁

一、甲島周辺 九丁式拾壹間

一、鎧島周辺 拾八丁の四間

一、稲木島周辺 拾壹丁三拾三間

一、高島周辺 式拾壹丁三拾貳間余

島々周辺合参里の九丁

山田郡

一、安治村止宿

是ヨリ壹手ハ島渡海、今一手ハ陸へ量

一、安治村

一、鎌野村 五拾三丁式拾五間余

道程メ式里式拾五丁五拾間余

右庵治ばしヨリ鎌野村三木郡大町境迄

寒川（さんがわ）郡

一、志度村止宿

是ヨリニ手相成、先手ハ室木浜北詰

鴨（か）部村々端迄舟ニテ御通行、是ヨリ量

始メ同所二本木橋迄終ル

道程式里壹丁四拾間、是ヨリ小田止宿舟

同日

後手ハ止宿ヨリ跡ノ鎌野大野境へ戻リ 是ヨ

リ量始メ

三木郡

一、大町村 式拾七丁の九間三合

同

一、原村 拾丁拾七間

寒川郡

一、志度村 式拾式丁の間四合

一、鴨部村ノ内室木浜北詰迄終、小田止宿迄舟

式拾丁四拾壹間

道程式里八丁八間

一、小田浦止宿 是ヨリニ手

先手ハ同所天神山ヨリ量始メ

一、小田村 右同所ヨリ津田境迄

四拾式丁式拾貳間式合

一、津田村北山郷泊リ、波止迄

式拾三丁拾貳間

道程メ壹里式拾九丁三拾四間

是二鷹島一ツ添終、津田止宿迄舟

同日

後手ハ右二本木迄舟ニテ戻リ右二本木ヨリ量

始

一、鴨部下庄 右同所ヨリ小田境迄

拾五丁参拾間

一、小田村 天神山ノ南浦戸迄終

道程メ壹里三十二丁五拾八間

津田止宿迄舟

一、津田村止宿 是ヨリニ手

後手ハ直二前日打終リ、郷泊リ波戸迄舟ニテ

御通行、同所ヨリ量始

一、津田村 四拾五丁の貳間

一、鶴羽（つるわ）村 四三丁四拾七間余寒川郡

終ル

道程メ式里拾六丁五拾間 止宿迄舟

同日

先手ハ止宿直二駕ニテ大内境迄御通行

是ヨリ量始メ

大内（おうち）郡

一、馬篠村 式拾式丁五拾六間

一、小磯村 式拾式丁三拾八間

一、西村 四丁八間

一、横内村 六丁五拾二間

右打始ヨリ鶴羽境迄一手先分

十月二十七日小田村苦張打終ヨリ同

御止宿迄 式拾六丁余

右打終ヨリ構谷（かまいだに）迄 六拾丁余

注 釜居谷の地名あり、宛字で構谷

右苦張ヨリ津田小馬立迄一手先分

丁数七拾壺丁余

津田小馬立ヨリ始郷島泊り人家迄

式拾丁余

右打始ヨリ津田御止宿所通り浜迄

五拾丁余

右打始ヨリ鶴羽境迄一手先分

六拾四丁 合七十壺丁

外二七町余り鷹島添

津田御止宿所ヨリ

鶴羽村西境ヨリ量始メ小磯境住吉鼻迄一手

先分 道程メ六拾六丁余

同日先手分

小磯住吉鼻ヨリ松原村新川迄

道法メ七拾壺丁余

三本松御止宿ヨリ

打終、松原新川ヨリ量始メ安戸村瀬鼻迄

道法六拾丁余り

同日先手分

安戸（あと）村瀬鼻ヨリ国境迄

道法六十丁 終

ここからまた別の資料である。測量の途中、遠山
仮目当て（遠山望見法）の目標とした方位と思わ
れるが、表示されている方位をどう読めばいいの

か分からない。
得意な方、御教示いただけると有難いと思つて
いる。

文化五年 久米栄左衛門 控
測量方御用鍼方位記

戊辰十月十一日より

折目で読めず

古高松竜王

弾端口ヨリ

屋島南角

右蠟印

同口島式前板

女木島高井

八丁石

大島森

平シマ大ホシ

大槌高

御殿端ヨリ

八丁石（カ）ハナ

稲木島松

大島森

弁井端ヨリ

御殿端印

女木島井

大島森

折目で読めず

前右六一十一四〇〇

前右六二三八〇

前右八五〇二〇〇

前右三四二五〇

先右五五五〇〇

先右三〇五五〇

先右八一〇〇〇

前右五一二〇〇

先左四二四一〇

先右六五五〇

前右八二一〇〇

前右八三二五〇

先右八二三〇〇

平島大ホシ

稲木松

高島神子松

観音端

坂ノ手観音

平谷口ヨリ

観音端印

稲木松

黒崎印

高島神子松

大串端

右同断四拾間計東二て

見送り平谷印

口口松

雨タケ

太鼓西端印

同所ヨリ

高島神子松

坂手観音

大串端

小串猿子

雨タケ

鴨部西庄竜王

太鼓端ヨリ

同所西端印

大串端

先左三八一〇〇

先右一二〇〇

前左八五二五〇

前左六五二〇

先左七二〇〇

先右五七二五〇

先右四五二〇〇

先右一一〇〇

先左四〇一〇〇

前左六四二四〇〇

先右四十三五〇〇

先左四七三〇〇

前左三一〇〇

前左二五二五〇〇

先左二五二五〇〇

先左六三二五〇

前左八八〇〇〇

前左三八四五〇

前左三〇三〇〇

前左二四二〇〇

先右〇十二一五〇

前左八八〇〇〇

小串猿子
 小串上松
 雨夕ヶ
 鴨部竜王
 五剣山
 高シマ神子松
 坂手観音
 大町村境印より
 大鼓印
 高島神子松
 小串猿子
 同所上庄
 鴨部下庄竜王
 十二日
 愛染寺端の西より
 広治村境印
 太鼓端印
 小串上松
 高島神子松
 鴨部竜王
 原村人家西川より
 五剣山高
 小串上松
 鴨部竜王
 雨夕ヶ松
 屋島南角
 志度真球島印より

前左三八四五〇
 前左三五三五〇
 前左三二三五〇
 前左三五四〇〇
 前右五十二三八〇
 先左三七一〇〇
 先左六十〇三〇
 先左〇十九二五〇
 先左一十三一五〇
 前左八五〇〇
 前左七五〇〇
 前左三十九〇〇
 *愛染寺：小豆島
 先左〇十二三〇〇
 先左〇十六〇五〇
 先左六〇五五〇
 先左〇十九五五〇
 前左五七四〇〇
 先右二六五〇〇
 先左四六三〇
 前左六四三〇
 前左五三〇〇
 先右六四〇〇〇

愛染寺印
 広治院印
 小串上松
 黒崎端印
 小串端より壺縄南口り
 真球島印
 愛洗寺印
 古高松竜王
 広治境印
 太鼓印
 黒崎印
 五剣山高
 大串西端岩印より
 小串端印
 古高松竜王
 五剣山高
 太鼓印
 観音東端
 黒サキ印
 坂手観音
 長磯印
 鴨部村境松ヶ谷間端より
 鴨部村境
 黒崎印
 坂手観音高
 馬齒
 小田波戸

先右七四二五〇〇
 先右三八三八〇〇
 先左三六三五〇
 先右一四式〇〇
 前左〇十六三五〇
 前右五十三〇〇
 前右五四三五〇
 先右七九〇〇
 先右三一〇〇
 先右一五三〇
 先右七一五三〇
 前右四九二三〇
 前右五二三〇
 前右八一二三〇
 先右八〇二五〇
 先右六一〇〇
 先右二七四〇
 先左五〇二〇〇
 先左八三二〇〇
 先右三八三五〇
 先右二九三〇〇
 先左四六三八〇〇
 前左六三三五〇
 前左四一一〇〇

高津浦中より
 同所西端
 坂手高
 馬齒
 天神波戸元
 針元東端
 高津東端印より
 松谷西印
 坂手高
 馬齒角
 小田波戸元
 同天神波戸元
 鶴屋谷（カ）の西端印より
 馬齒地平手坂口所
 坂手高
 鳴戸松
 通念島
 津田境
 虎端印
 鶴ヶ屋西印
 坂手高
 通念島
 犬尻り
 丸神高
 小磯竜王
 虎丸高
 江泊り印少北より

先右一四五〇〇
 先左三六四〇〇
 先左六十〇〇〇
 前左七六二五〇
 前左七一〇
 先右二六四〇…スミ
 先左三六〇〇
 先左五二三五〇
 先左七五〇
 前左七九四〇
 先右四三〇〇
 先左三十〇〇
 前左七九二〇〇
 前左五四十五〇
 前左三五三五〇
 後印
 先右三六〇〇
 先左二五三〇
 前左五五二〇〇
 前左五十五〇〇
 前左三三〇〇
 前左二五二五〇
 前左一七二〇〇

虎端	先左〇十三三〇
坂手高	先左二二〇〇
鳴戸松	前左七四一〇〇
通念島	前左六〇二〇〇
丸神高	前左四四四〇〇
小磯竜王	前左三三一〇
虎丸高	前左二〇三〇
雨夕ケ	前右三三三五〇
鶴羽川尻より	
江泊り	先左〇十七四〇〇
坂手高	先左二〇〇〇〇
弁才鳥居	先左五九四〇〇
丸神高	前左八八二〇
小磯竜王	前左六六〇〇
雨夕ケ	前右八九五〇〇
鵜部山西より	
雨夕ケ	前右七六三〇
五剣山高	先右五五三五〇
江次り印	先右〇十八二五〇
坂手高	先左一八〇〇
丸神高	前左七六四五〇
鶴羽一ツ山高分より	
鵜部山印	先右五六二五〇
名子島打始	先右二三二〇〇
虎端印	先右〇十九一〇〇
坂手高	先左一七〇〇
丸神高	前左八八〇〇
小磯竜王	前左五一二〇〇
ウツワセ	前左三一三〇

馬篠田尻川より	
五剣山	先右五四三〇〇
鶴羽東印	先右四五一〇〇
江泊り印	先左一六四〇〇
坂手高	先左一二〇〇〇
丸神高	先左五四二〇〇
小磯竜王	前左六二〇〇
口吉端より	
雨夕ケ	先右八四一五〇
江泊り印	先右三九一〇〇
丸神高	先左一七〇〇
小磯竜王	前左〇十一二〇〇
鷺巣より	
口吉端印	先右五四三五〇
坂手高	先左〇十五〇〇
一ツ島高	先左八一二五〇
二子島西高	前左八四四
辰ガハナ	前左七七二〇〇
イホガタケ	前左三七四〇
鯨島より	
通念島梵天	先左八一〇〇
国境	前左四一三〇〇
引田波戸先	前左六四二〇
浦境猿子より	
安戸池西波戸	先右五九〇〇
三本松一ツ島	先右三七三五〇
双子島高	先右三四二五〇〇

坂手高	先右一三五五〇
沖島西角	先左八七〇五〇
筆一掛松	先左八八三四〇〇
通念島梵天	前左八七〇〇
犬尻り端より	
辰ケ端印	先右五四〇〇
馬齒	先右四九〇〇
一ツ島高	先右三六〇〇
双子島中	先右二三三五〇
坂手高	先右一一三〇〇
金掛松	前左八五〇〇
沖島西角	前左六八〇〇
通念寺梵天	前左六二三五〇〇
猿子島高	前左四一三八〇〇
ここからまた史料が変わります。色々な場所での接待関係の記録を集めたメモのようです。栄左衛門は藩の責任者ですから、各地の情報を集め指示せねばならなかったでしょう。	
久米栄左衛門伊能測量控	
文化五辰年	
測量一件聴書	
八月	
川江庄や助(カ) 右衛門	
手代伝次郎	
控	
一、金式両式歩式朱	
六十八文也	

此金百七十八文五分
島ちりめん 式足

松山領

一、布三反 井納

*井納・・・伊能のこと、宛て字。

但シ壺反二付金壺両ツ、引受

一、同式反ツ、 秀藏殿並同心中

但シ右同断

一、同壺反ツ、 内弟子中

但シ右同断

一、小杉七束ツ、いの党中へ *いの・・・伊能

くわし折中共 *くわし折・・・菓子折

但シ金三步二引受

一、同五束ツ、 中間中

但シ金貳百足二引受

△

右の通 □奉行より自分

進物の由、尤代官より兼帯

相勤候心ニ相聞申候

ここに出てくる引き受け、という言葉が気になる。例えば中間に与える小杉紙五束を二百足に引き受け、という文言は、文字どおり中間に小杉紙を与えた。要らないので換金したら二百足になったと読むべきか。

最初から二百足の積りで小杉紙五束を与え、すぐ代わりのお金に取り換えたと読むべきであろうか。伊能への金品の贈り物は帰府後堀田摂津守に伺ってから受納された。面倒なので、諸侯も金品でなく、地元の名産を送ることを常とした。

この文章からは断定はできないが、後者の匂い

がする。エスカレートすると品物を貰ったことにして、という話も一部にはあったかも知れない。

今治領

一、木綿五反 井納

但シ金五百足二引受

一、同三反ツ、 五人

但シ金三百足ツ、二引受

一、同式反ツ、 内弟子中

但シ貳百足ツ、引受

一、御紙 侍竿打共

但シ金百足ツ、

一、同 中間

但シ銀三両ツ、引受

△

右の通 □奉行より進物

土州

一、鐔百丁 井納

一、同八十丁 五人

一、同五十丁 内弟子

一、同 中間

くわし折共

△

鐔百丁はどういう意味だろう。名産であろうか。

以下は設営に関する他領の情報である。

今治

伊能手代式人、手附壺人

坂部手代壺人

御代官ハ出不申候

料理壺汁五菜前後
平日壺汁三菜程(力)
掛(力)り、大庄屋、小庄屋

総舟三拾 *使われた船数

小屋式間二四間半、三仕切 *休憩用小屋

但土間縁厘 *厘・・・小さい区切り

御道中右式人

煙草盆火口杯

押送人足四拾人

松山同御領五十人

郡切三拾人 *郡切・・・ぐんかぎり

△八十人にて二手遣

同切人夫、松山八百三十人

荷物送方今治百人計

実ハ八十人計にて相借候よし

小庄屋など進物通

伊能御親子二間風呂一所

但雪隠ハ一所二ても宜候

内弟子中壺間 風呂壺つ

若徒壺間 雪隠一所

小者 壺間

坂部小者、棹取ハ別間

飯雪隠壺つ持送 *持ち運びトイレか

栄左衛門聞説

*聞説・・・聞くとところによれば

一、押通候人足五十人

但シ一手先二貳拾五人ツ、にて

二手先も積り

右同断

- 一、船九艘 壹手先分
但シ壹艘ハ鯨船ハ艘ハ蠟船
右の通二手先分用意

文化五辰年

土器村

測量御用二付宇和島御領聞合写帳

八月二十一日丸亀ニテ写取申候分

- 一、御国境御飯小屋

式間二五間式組

式間二三間式組

但シ涼台、薄縁、屋根、とゆ(とい)

廻り幕圍此所御昼休二相成候

御熨斗、三方

御菓子、御刀掛

- 一、御小休、幕串圍天幕張

但シ右は式間二五間、亦ハ式間二七間ニテ

も広狭寄り如何様共取計出来仕候様の御手

当ニテ御坐候

且亦皮付床几 十

*床几・・・しようぎ・・・腰掛

右は涼台難用シ

*用い難し 意味よく分からない

- 一、飯雪隠 杉戸四枚角ヲ合 屋根板覆

但手水鉢手掛

- 一、御夜具葛簞二入、御名札付ニテ

御國中持送りの事

- 一、蚊帳並ゆかた 同断

- 一、朝、刻限延引の時ハ甚御立腹の由、朝七ツ時迄二 人足万々手都合仕、相待居申候様可仕の事

- 一、御本陣庭の片脇へ目印建の事

但シ五色もめん長丈計、長間

分縫合有之候 是ハ御宿へ持送り

- 一、初て止宿並御他領へ御移りの節は、御酒差出シ但シ吸物御取看見合

- 一、御宿御仕成方、御間割

但シ御宿壹軒ニ候ては六間相入候 尤手狭の時ハ二軒三軒ニても致候事

但シ相応の家居無之所ハ寺院ニても御宿仕構候事

一、御朱印台は伊能様一間ニテ相済候事

一、御熨斗三方御菓子は間毎二入候事

一、御膳碗御上下の無差別差出シ候事哉

答

但シ朱か黒か有合鹿末無之品差出候事 但上下無差別黒宗和類相用候

*宗和類・・・金森宗和の好みの、黒又は朱塗りの低い四足膳、懷石用で民間では本膳に用いた。

一、御泊り御料理向の事

一、御昼御料理の事

此二ヶ条初て御入込の御泊り城下御泊り、御当着御出立の節、上下無差別壹汁五菜、其余御通行中ハ御休泊共一汁三菜の事 但シ御昼野間、御船中等ニても差出し候時ハ煮肴、煮染(にしめ)の類ニテ差出シ候事

一、宮仕十五六男子 拾五人袴着用の事

一、床飾付の事

但シ御朱印台の外都て飾向無之候事 刀掛有

之見苦敷無之品相用、御朱印台下へもふせん

*もふせん・・・毛氈

- 一、御召船へ御舟頭壹人宛

但羽織、袴ニテ相見へ申候

- 一、伊能様御召船 壹艘

石数五拾石積程

但シ御領主様御紋付麻幕内へ紫幕、御菓子、熨斗、三宝、燭台、もふせん、ふとん、刀掛、多葉粉盆

一、坂部様御召船 右同断

但シ 右同断

- 一、お御茶方船 式艘

但シ御召船二付添 家形野風呂御坐候ても、土びんニても数六ツ計

- 一、道具積廻シ船 式艘

一、梵天竹持、縄引、棹取、股木持、乗船六艘

但シ一手二三艘宛

- 一、御駕船 式艘

- 一、御飯雪隠 式艘

- 一、御用船 五艘

但シ海上ニテ臨時御用

一、いろは印付船 式拾艘

但シ臨時御用意船

一、御召船加子 七拾人

但御仕着

一、魚船加子 三百六拾人

右の船印不残御替紋九曜舟ノ印立、別ニ紙幟ニテ夫々印別人足二も

右紙幟合印ヲ木札書付致シ腰二付居申候

右人足宿門々紙幟の印立置申候

土州御献上の品

土州御献上の品

土州御献上の品

土州御献上の品

土州御献上の品

土州御献上の品

- 一、御本主様 鯉節百本
- 一、同心中様 小杉原三十束
右同断八十本ツ、
小杉原二十束ツ、
- 一、内弟子様 鯉節五十本ツ、
- 一、侍 金子貳百足
- 一、棹取 同百足ツ、
- 一、小者五 銀拾匁ツ、

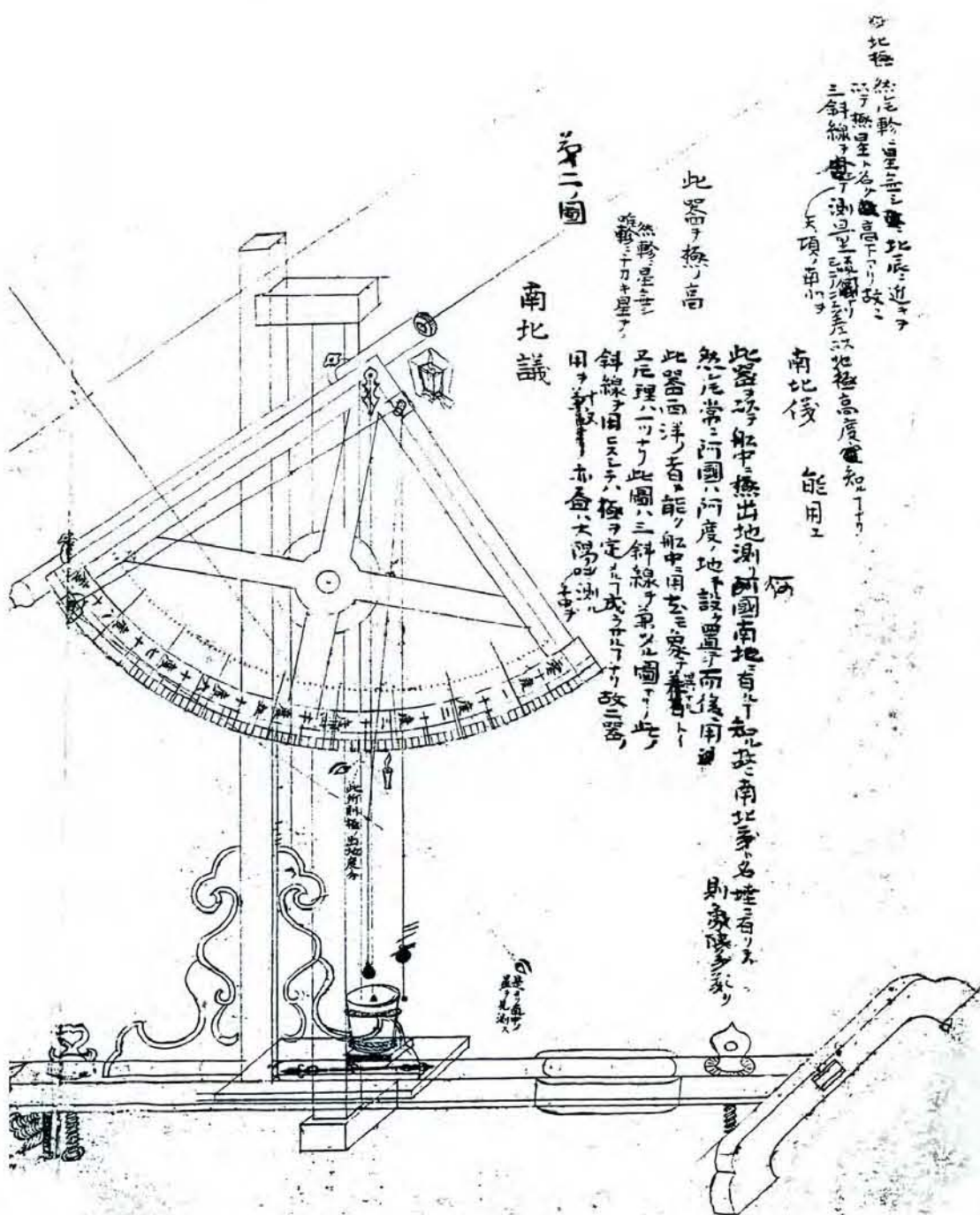
宇和島御献上の品

- 一、御本主様 綾布三反
金子三百足
- 一、同心中様 綾布壹反
金子三百足
- 一、稲生様 綾布壹反
金子百足
- 一、内弟子様 金子百足ツ、
- 一、侍 金子百足
- 一、棹取 銀貳両ツ、
- 一、小者五人 鳥目三百文
ツ、

右の通御越境の為御祝義、深浦二て差上申候
一、御城下御入込の節ハ 相応の品差上候様相聞
申候

久米栄左衛門が収集した謹呈品のリストである
が、小者に少額の現金を与えた例はあるが、こ
こでは忠敬にも三百匁が渡されている。珍しい。

おわりに
まことに、不完全な地域史料紹介であるが、御容
赦願いたい。入力が高宮勲さんを煩わせた。
絵が無いとさびしいので、久米栄左衛門自作の象
限儀を紹介する。



左図：久米栄左衛門自作の象限儀

窪谷婦人妙真のこと

窪谷悌二郎

『伊能忠敬研究』二〇一二年 第六六号に、伊能楯雄氏の随想「香とりの日記」の頃が記載されていました。

昨平成二四年は、この中に記載されている法名・妙真こと窪谷せやの「生誕二五〇年」の年であり、この節目の年に伊能忠敬研究会の会報で紹介頂けたこと、有難く感謝致します。此処で、生誕二五〇年を追憶して妙真さんのこと、潮来にて伝承されていることを書き述べてみます。

妙真さんは、私悌二郎の家・窪谷仲右衛門家の本家である窪谷庄兵衛家九代藤右衛門維則夫人でした。

窪谷庄兵衛家と窪谷仲右衛門家との続柄は旧く、庄兵衛家初代與治郎の父窪谷山城幸文が、下総国窪野谷村から移徙し、潮来村に土着したのが天正年間頃、初代與治郎、二代目與治郎と続き、三代目を継承したのが、仲右衛門家初代忠右衛門の父藤治郎でした。

庄兵衛家は水戸藩潮来村にて回船業を営み、仙台河岸にあった仙台藩の御穀宿を預かって居りました。

当時、仙台藩は、初代・貞山公政宗の治世、慶長一年（一六〇六）には、新たに常陸国に於いて龍ヶ崎村を含め二六ヶ村で一万余石の飛地、龍ヶ崎領が与えられました。それから一九年後の寛永二年（一六二五）八月二三日、貞山公は江戸を出立して、初めての龍ヶ崎領の検分を行なわれました。

そして、九月一日には現在の茨城県稲敷郡美浦村の余郷入から霞ヶ浦を渡り板久村（元録一二年、義公光圀の命により「潮来」と改名）に着き、庄兵衛宅に御宿泊なされ、鹿島から、江戸に御戻りになされました。

仙台藩の歴代の事蹟正史である『伊達治家記録』の内、『貞山公治家記録』には

九月丙戌小朔日丁未。

板久へ御立、鹿島御見物ト云々 御参詣アリシヤ不知。

とのみ記述されています。

仙台藩主で潮来にいられているのはお三方で、初代貞山公政宗、五代獅山公吉村、七代徹山公重村であり、重村公は二回お出でなされています。そして吉村公は『鹿島海道記』享保一三年（一七二八）を、重村公は『鹿島道之記』安永九年（一七八〇）をそれぞれ書残されています。

七代重村公は、幕府天文方支配若年寄・堀田摂津守正敦の異母兄

本家窪谷庄兵衛家に残されている『仙台屋敷事件旧記より書抜覚』（窪谷孝太郎著）には、次の文が記載されている。

安永九年子五月

仙台様御下向鹿嶋通行之節御目見願書写

乍恐以書付奉願上候

一、此度御下向被為遊候付、鹿嶋御通行、当所御

旅館被 仰付、夫二付、拙者儀、先年之通献上物仕、於御本陣御目見被 仰付被下置候様奉願上候

一、拙者先祖御借金御用相達御出入罷在候二付

貞山公様より上意之上、曾祖父藤右衛門、幼年之節、名ヲ百介与被下置、御目見被 仰付、御紋付御上下拝領難有冥加至極申伝、家珍仕罷在御代替等之節、江戸於御屋敷御目見仕候節茂先年より引続右御紋付御上下着用御目見仕来り恐多冥加至極難有奉存候

安永五申年鹿嶋御通行当所御旅館被 仰付候節茂先年之見合ヲ以願書指上候義二御座候

一、先年当所江御屋敷御立被遊候節茂、拙者先祖江御内々被御渡御屋敷二可罷成場所等之義迄茂御国元並江戸御屋敷様江茂度々罷出 御双方様御相對申立、慶安二丑年拙者先祖右御屋敷之義万事□□斗御草分仕、直々御穀宿御用被 仰付、只今迄百三十年余御用首尾能相勤、罷在候儀も御座候

何卒願之通、当所於御本陣御目見被 仰付被下置候ハ、冥加至極難有仕合二奉存候

以上

安永九年子四月

潮来 御穀宿

窪谷庄兵衛

仙台御屋鋪様

これが書かれた安永九年（一七八〇）とは、八代目庄兵衛信久の時であり、仙台藩主は七代重村公の治世。

重村公のご帰国時、潮来通過に際して願いだされたものである。

信久の云う曾祖父藤右衛門とは庄兵衛家四代目藤右衛門重久のことであり、二代目與治郎の二男である。

家督は兄藤治郎が取っていたので藤右衛門を名乗っていたものと思われる。

重久は、元禄一二年(一六九九)に歿している。歿年齢は不詳。

貞山公が板久に來られた寛永二年(一六二五)は七十四年前、生まてまもない頃に百介と云う名を拝領した。

このことに憚って三代目藤治郎は、弟藤右衛門が成人したのに伴い家督を譲り、実子を伴って隠居した。

そして、実子の忠右衛門を分家させ、後の窪谷仲右衛門家を創始させた。

庄兵衛家三代目藤治郎 明暦 三年(一六五七)歿
仲右衛門家初代忠右衛門 延宝 五年(一六七五)歿
庄兵衛家五代目安貞 元禄 元年(一六八八)歿
庄兵衛家四代目藤右衛門 元禄一二年(一六九九)歿

右の年代から考察すると、仲右衛門家の創始は一六五七年以前、寛永後半から正保・慶安・承応(一六三七〜五四)の頃と推測される。潮来村の年寄制度の制定は、『潮来沿革史』に次のように記述されている。

水戸藩威公以来、窪谷太右衛門、窪谷庄兵衛、窪谷仲右衛門、宮本平太夫、宮本山三郎、石田半右衛門、関戸利右衛門、関戸喜右衛門

以上八人は、水戸藩より代々潮来年寄を命ぜられ、……

水戸藩祖徳川頼房公は寛文元年(一六六一)に薨去されている。

この兄弟の間には、兄藤治郎の女と、弟藤右衛門の嫡男とを娶せて庄兵衛家の五代目を相続させることにした。本家庄兵衛家と分家仲右衛門家との間の婚姻は、唯この一回のみであり、この時代としては希有なことであった。

それから庄兵衛家は、六代・安信、七代・了達、八代・信久と続いて来て、そして九代目。

窪谷藤右衛門維則

寛延二年(一七四九)生まれ、天明七年(一七八七)四月十六日歿、享年三十九

順譽寛察榮真信士

父、窪谷庄兵衛家七代目庄兵衛の嫡子・藤次郎信久

享保十四年(一七二九)に生まれて、文化

五年(一八〇八)七月二日歿、享年八十

深譽慧通法達信士

母、下總國香取郡佐原村 伊能七左衛門女・ミツ

元文四年(一七三九)に生まれて、文化八

年(一八一)三月廿二日歿、享年七十三

德譽妙智等倫信女

妻・セヤ

下總國香取郡佐原村 永澤忠右衛門尚俊女

宝暦十二年(一七六二)に生まれ、文政十

二年(一八二九)三月十四日歿、享年六十八

相譽貞節妙真信女

父、佐原村伊能七左衛門の長男・永澤忠右衛門尚俊

寛保元年(一七四二)に生まれ、文化八年

(一八一)八月廿一日歿、享年七十一
縁了院常嚴日理居士

母、佐原村 永澤次郎右衛門の女

天明元辛丑(一七八一)十月廿二日歿、

享年七十二?

円珠院妙証日口法尼

その存命中は、両親共健在であり、庄兵衛家では寛延年間(一七四八)から天明六年(一七八六)六月迄の三十八年間、潮来村の庄屋を務めていた。父の八代目・信久は天明六年と云うと年齢五十八才であり、当時ではかなりの高齢である。『常陸紅葉郡鑑』によれば、「村年寄：庄兵衛伴十野衛門」とあるように、藤右衛門維則が庄屋の職を補佐していたか、務めていたように思われるが、資料は全く残されていない。

先に引用した関戸覚蔵が編んだ『潮来沿革史』第二卷第三章「人事」第三項に『窪谷婦人妙真』として収録されている。



左より、二代浄覚塔、九代榮真・妙真塔、十代順養子実成塔

唯、夫人に関するものが残されており、それらを羅列してみると当時の庄兵衛家の状態を知ることができる。

潮来沿革史 第貳巻 第參章 人事

三、窪谷婦人妙真

貞節の婦人に窪谷妙真あり、本名を世也と云う、北総佐原村永沢忠右衛門の二女、宝暦十二壬子年七月二十日を以て生る、天明元辛丑の年潮来窪谷藤右衛門に嫁す、妙真性温厚にして寡言沈黙苟も談笑せず、歌道及び茶の湯、裁縫の造詣深く又た琴曲に巧なり、妙真婚嫁数年にして窪谷氏災害切りに至り家産殆ど傾倒し、日々の生活にも差支ゆるに至れり、之れに反して生家永沢氏は郷党無比の富豪なれば、実父母之れを愍み窪谷を辞して家に帰ることを勧む、其意蓋し相当の家に再婚せしめんと欲するにあり、妙真辞して曰く、貧富は世の常なり、女子既に他に婚嫁す、貧なるの故を以て去るに忍びず、然れども我はいま子なければ三十歳まで尽力し、多少家産の回復を見届け、女大学の七子子なければ即ち去るの遺訓に従うべし、幸にして子を挙げんか、仮令粉碎身すと雖も、夫に事ひ、児を養ふを終身の勤めとなす、父母其動かし難きを知りて再び離婚をせまらざりしと、天明七丁未年四月十六日藤右衛門三十九歳を以て病没す、妙真時に年二十六是れより髪を絶ち名を妙真と改め、自分が所有せる衣類中の絹布類及び結髪具等目星しきものを残らず売却ひ、其金を以て亡夫埋葬の地に

順譽寛察榮真信士（亡夫の戒名）
相譽貞節妙真存住（自己の戒名）

を刻したる石碑を建て、其の決意を示す、是れより寡居経営一に冗費を省き、節儉を主とし、断して華美を避く、傍ら女子に読書、習字、裁縫等を教授す、行方、鹿島、稲敷、香取の各郡中流以上の家庭に於ける婦女薫陶を受けたるもの数百人、各々成就する所あり、妙真常に好んで琴を弾じ、月明の夜、花下の朝、低唱自ら娛む、適ま琴の稽古を望むものあれば、我は一家団欒の樂を欠くを以て、夫れに替ふるに琴曲を以てす、曲賦元より律に合わせず、之れを自己流都や云はん、故に他人に教ゆべからず、強て習はんとせば、去つて他師を撰べ、凡そ女子が婚嫁の後、良妻賢母と云はれんと欲せば、琴曲を習ふの暇あれば、女だいがくを通読し、女子たるもの、務めをわきまひ、孝経を讀んで孝道の大本を識り、其任を尽すに心掛けよ、凡そ人の妻女たるものは、専ら家を整へ夫をして後顧の憂なからしめ、子孫の教養に力を注ぎ、将来一家繁榮の基を立つるが本文なりと、諒々訓諭倦むことを識らず、是の如きもの四拾余年、藩主妙真の貞節を聞き、時服其他金品を賜りしこと数次、後年家道大に興る。弟庄兵衛を順養子とし、家名を嗣かしむ、文政十二年三月十四日没す、年六十八、其後門人等相議して其行状と自ら作るところの琴歌を右に刻し、之を浄国寺の境内に建て、今に存せり、其の琴歌なるものは左に、

むかしおもへばなつかしや、
かはればかはる世のならひ、
夕陰またぬ朝かほの、
花にならひて我せこが、
はかなくな利しあたし野の、
烟の末の村しくれ、

いくたひ袖にかゝるらん、
梅なき宿になく鶯、
月なきよ波のほとゝぎす、
秋の夜すから啼虫の、
ぬれ衣きせて袖しぼる、
みさを、たつるあまの船、
水のうたかたきえもせて、
いまは六十路の年もへぬ、
空にしくれぬ髪雪、
我世はかなくをいはつる、
あわれかなしき身の上を、
過にし人わ、あまかけり見む、

碑石に刻するところに依れば、上記記載の琴歌は妙真身上平成の感を表はしたるものにて、常に低唱したりしなるが、人亦た其何の曲なるを知らざりし、妙真死亡後、其稿本を遺篋に得、之れを碑石に刻したるものなりしと云ふ、妙真の詠せられたる短歌あり

朝夕に 文よむたひに 思ふかな
己がゆをしゆる 道は如何にと

そして、碑石に刻するところの石碑は、窪谷一族の菩提寺である浄土宗大永山浄国寺にある。

子供の頃から顧みればともかく、よく事あることに移動をさせられた石碑である。

碑は、宮本茶村の撰文、『行方郡郷土史』、秋永毅堂註解『雙硯堂文集 水雲宮本先生遺稿』、大久保錦一編著『夢に挑んだ先人たち』に記載収録されている。



窪谷夫人妙真君筆子等建立の碑

妙真君婦徳之盛當時既為郷黨標準則舉之雖以模範於通天下婦女可也何啻親炙者僅數十百人所敢可私邪是羣弟子之志也是以今不及具載立石者名氏云
嘉永六年癸丑春三月

むかしおもへば なつかしや
かわればかはる 世のならひ
夕陰またぬ 朝がほの
花にならひて わがせこが
はかなくなりし あだし野の
烟の末の 村しぐれ
いくたび袖に かかるらん
梅なき宿に なく鶯
月なきよはの ほととぎす
秋のよすがに なく虫に
ぬれ衣きせて 袖搾る
みさををたつる あまとふね
水のうたかた きえもせで
いまは六十の としもへぬ
空にしられぬ 髪は雪
わがよはかなく おえはつる
あはれはかなき 身の上を
過にし人は あまかけりみむ

伊能忠敬が書き残した日記五十一冊の内、最後の『江戸在記 忠敬先生日記 五十一止』を、佐久間達夫氏が解説され「家族・親戚往来分」として纏められたものがある。

この『江戸在記 忠敬先生日記 五十一止』は、文化十二年（一八一五）一月一日〜文化十四年三月二十九日のものである。このなかに、文化十三年二月九日 曇、微雨。潮来、妙真来る。

とある。

忠敬を江戸に尋ねたのは、妙真、五十四才の春であった。この翌年、文化十四年九月廿四日には順養子であり義弟であり、姪・世代の夫でもあった一〇代庄兵衛高包を亡くしている。

また、「九十九里町誌資料集 第七輯上巻」『文政七年（一八二四） 諸用留 貫兵衛記』に、

十月九日 大森便二而別紙褒詞書届

鈴木弥左衛門扱下

潮来村

庄司祖母

妙信

一青銅五貫文

右之者先年下総佐原村より縁付参候處廿六才之節夫相果一子も無之亡父弟重郎右衛門と申者致養子候所舅庄兵衛及極窮親類共見継二而取續居艱難二は候得共舅姑大切二取扱猶又亡夫一周忌之間其靈前江も願□如存生相務候由二而親類共相憐度々再縁を進候得共承知不致且は困窮之□□役介二相成居候ヲ氣之毒二存舅姑等江も相談之上奉公二罷出七ヶ年相勤暇ヲ取佐原村実父方二罷在候處是又困窮□上相續致候兄致病死幼年之甥病身之嫂而已二而父母□□改候者無之ニ付里方二止リ女子共手習致指南兩親介抱致居候處舅庄兵衛儀も困窮老年故見るに忍び兼屋敷暮方之内より夫婦之者江年々衣類等迄相送其後兩親共相果候ニ付親類共江も相談之上佐原引拂潮来村江罷歸舅姑引請介抱之暇手習指南之謝禮二而孝養之介ニ致候尚又寡婦二而世評も可在之と常ニ容貌ヲ崩虫齒之由二而

妙真永澤氏琴歌並并引 佐原女弟子等建石
妙真君諱世也永澤氏下總佐原人忠右衛門尚俊之女也嫁常陸潮来人藤右衛門窪谷維則維則早死無子以弟莊兵衛高包為嗣君及寡居自稱妙真敬養舅姑恩育子孫履操貞潔不妄言笑積數十年益堅是以當時郷黨間父母教導婦女者皆至指君以為其標準焉事達 公庭褒賜交下君傍善書兼嗜和歌亦自臨摸諷詠以娛耳未敢示人也而婦女乞姆訓受書法者門館滿晚作琴歌一篇以寓其身世平生之感低唱慢撫以自遣而人亦不知其為何曲也年六十八病終實文政十二年三月十四日也婦永澤氏君兄吉郎兵衛俊安之女自幼受其訓誨且傳書法一日得琴歌藁本於遺篋中始知嚮者所唱為其自述之辭然病其細字不便誦讀追慕之餘展拓臨之乃者女弟子佐原某氏等觀之以為是先師自叙豈可不垂之不朽以傳遺芳於後昆乎相共贖資謀以勒石永澤氏固辭其書陋劣不得髣髴衆執不聽因錄其梗概併鐫以為之引吁嗟

前齒をかき老婦之如二相成介抱二傾極老之兩人夜具も手薄二付自分之衣類二而夜具寐間衣類等迄拵爲致便寐食物等之儀もよく心ヲ付萬事不自由無之様取扱候處庄兵衛儀老病二而半年餘取臥居相果候得共昼夜聊も不急病床二付添居二便共人手二不懸懸二致看病其後姑も相果候處是又同様病中之介抱手ヲ無殘處取扱候由右庄兵衛及大病候節も数年□及孝養等之厚ヲ感嘆之餘り親類喜右衛門□□□遺□□□ヲ以相渡候由猶又重郎右衛門致相續□□□とも壯年二付致後見先年奉公致候内貯置候衣類賣拂廻し金致往々田畑二而も買求度存念二而致丹精候處重郎右衛門儀種物二而兩三年相煩療養手ヲ尽候得共不相届相果打續物入等二而手當之金子も遣田畑買入候儀も相成兼候二付殘金之分村役人江預ケ孫庄司若年二付本宅江引移萬事心勞致世話居候處手跡迎も郷中ニ少ク今以遠近行状実儀慕い女子共数人被頼手習又ハ紡績之業ヲ教謝禮ヲ以暮方足り合致候由猶又文化六巳年中御歸國之砌御用金指上候者右村方ニ数多在之處重郎右衛門窮迫之砌力ニ不及先年ハ御用金大金差上御得共不行届儀ヲ残念ニ存筆子指南等ニ而屋敷内より多年貯置候金子指上切ニ相納旁心得□□之由申出候趣も在之件之通年若より貞操ヲ相守数年艱難心勞致父母舅姑江孝養相尽候段奇特之至ニ候依之為褒美青銅被下置候条為取可申者也

右は水戸様御領内窪谷庄司祖母江紅葉村出張御役所郡奉行鈴木弥左衛門殿ヲ以文政七申年八月五日被下之候書付之写

が書き留められており、「妙信」は「妙真」の誤記であり、浄国寺の石碑に記載されている『…』

事達 公庭褒賜交下…』を裏付けている。潮来では、どの様な褒賜を受けたか不明であった。

亦、これに関係して

十二月大晦日

(前文略)：夫より篠崎栄次殿宅江、罷こし、潮来妙信褒詞書付持参碑銘相頼

ともある。

篠崎栄次司直の碑銘撰文は記録になく、後、順養子・庄兵衛高包の女婿である宮本茶村による撰文の碑が建立された。

鈴木弥左衛門：水戸藩紅葉組郡奉行。

在任期間は、文政三年(一八二〇)六月十九日

～文政十一年(一八二八)七月十五日。

当時の紅葉組の扱村は、六九ヶ村であり、その内、所謂「潮来領」は十六ヶ村、一万石と云われていた。

『水戸市史 中巻(二)』第三節「農民の生活」第十四章「士民の生活・風俗」九二四頁に

享和二年(一八〇二) 水戸藩は領内を十一郡に分け、有能な郡宰を配置して農村振興を計り、翌年にかけて、農村の生活力調査(俗に貧富調べ)を行った。

この調査は、一戸毎に持高・田畑山林の面積、家族の性別年齢、病気の有無、下男下女・馬・溜桶の有無、諸年貢指銭の高、拝借金額・居宅・灰屋・蔵の大きさ、年貢未進の有無などを記し、

それに生活程度を「有福」「相応」「困窮」「極窮」の四段階に分けて記させた。

この四段階の基準は

有福：食料も足りて貯えや山林なども少々

あり、拝借金は少ない者

相応：手一杯に暮し、肥料など購入できる者

困窮：食料は一年分に少し不足するような者

極窮：食料は半年以上不足し、肥料にする刈

敷もなく、拝借金も多くある者

となっていて、主として食料の有無、拝借金の多寡、施肥料の多寡に重点がおかれている。

この記載内容と「潮来妙信褒詞書付」を合わせると当時の庄兵衛家の経済状態を窺い知ることができる。

『享和二年(一八〇二) 水戸藩は領内を十一郡に分け、有能な郡宰を配置して農村振興を計り』とあるが、この時「潮来領」は農政学者として著名な小宮山次郎衛門昌秀の紅葉組の配下となった。

『小宮山次郎衛門昌秀』「水府系纂」によれば

寛政十一年己未五月七日格式近習番二進ミ、是年十一月二十九日郡奉行トナリ格元ノ如シ南郡ノ内十数ヶ村ヲ分テ支配シ、紅葉村ニ役所ヲ建テ此ニ住ス、高野文助世龍ト共ニ当役郷地ニ居住ノ始ナリ。享和元年辛酉十一月二十四日郡奉行本職ノ席トナル。

とあり、文政三年(一八二〇)六月十九日に離任した。

この間、二十一年に亘り、荒廃・疲弊した郷村を勧農殖産政策と善政により立て直しを図り、見事よみがえらせた。

また、村民の教化のため、水戸藩郷校の先駆ともなった小川の「稽医館」や潮来の「延方郷校」の設立をし、下総国津宮村の儒者久保木清淵先生を招聘して子弟の教育に努めた。

そして、貫兵衛とは、飯高貫兵衛尚俊、窪谷庄兵衛信久の三男・征四郎のことである。

伊能忠敬の養子となり、後、伊能忠敬の刎頸の友と云われた上総・栗生村の飯高惣兵衛尚寛の次女・千枝と婚姻し、飯高家を継承することになる。

飯高貫兵衛尚俊

窪谷庄兵衛家、八代目庄兵衛信久の三男・征四郎上総国山辺郡栗生村 飯高惣兵衛に行く。

宝暦十一辛巳（一七六一）に生まれ、

天保元庚寅（一八三〇）十二月六日歿、享年七十。

稟受院慈徳日萬

相模國東浦賀村 東耀山顕正寺 飯塚家墓地に葬る。

貫兵衛尚俊の長男・？兵衛尚義は、文化二

年（一八一四）、東浦賀にて干鰯商いをはじめ、

一三年に干鰯問屋の株を購入し、栗生・飯

高家の浦賀出店である干鰯問屋「飯塚屋」を

開業する。

後、飯塚屋は次男・吉太郎ら兄弟が預かり経営し、貫兵衛は、後見のため東浦賀に移住する。

飯高惣兵衛尚寛については後日記述してみたい。

仙台藩蔵屋敷と潮来の繁栄

（利根川の東遷）

徳川家康入府以前の利根川は江戸湾（東京湾）に流れ込んでいた。幕府は河川改修工事を行い、太平洋に流れ出ていた常陸川の上流に利根川を付け替えた。寛永十八年（一六四一年）に江戸川が通水した。その後、承応三年（一六五四年）に赤堀川（開削による）通水が成功し、利根川の水が赤堀川を流れて常陸川に入り銚子から太平洋に流れ出た。これにより江戸の水害対策と、江戸と関東・東北方面を結ぶ水運のネットワークが形成された。

（東北方面からの物資輸送は）

房総半島を迂回して江戸湾に入る東回り海運コースがあったが風待ちや技術的に難しく危険も多く初夏から土用までの三ヶ月間しか使えなかった。それに代わるものとして水戸藩により開拓されたのが内川コースと呼ばれる潮来ルートである。

①那珂湊↓涸沼↓海老沢（陸送）↓塔ヶ崎↓

北浦↓潮来↓佐原↓関宿↓江戸

②那珂湊↓涸沼↓大貫（陸送）↓銚田↓北浦↓

潮来・・↓江戸

これにより潮来は一層繁栄することになった。

「江戸時代人づくり風土記8茨城編」発行 社団法人

農山漁文化協会企画編集）によると

仙台藩蔵屋敷は慶安二年（一六四九）に窪谷庄兵衛が世話人となって、津軽藩蔵屋敷はそれよりやや遅れて宮本平太夫が世話人となって建てられた。窪谷・宮本両家はそれぞれ仙台藩・津軽藩の御用商人として繁盛した。潮来の繁栄ぶりは水戸藩御用金にみる事が出来る。元禄十三年（一七〇〇年）の出金者名簿によると、一位は三千両の

宮本平衛門、二位は千三百両窪谷庄兵衛、以下五位まで潮来勢が御用総額一万六千三百十八両の三三%を占めている。

（コースの変遷）

①洪水や浅間山の噴火等により本流が変わり浅瀬ができ大型船の航行が困難になった。②外洋大型船が出現した。③航海技術が進歩した。①②③等の理由によりコースは変遷した。最終的に利根川の水運は鉄道の発達により衰退を余儀なくされトラック輸送の発達によりほぼ壊滅した。

（伊能測量の背景 ―利根川の水運―）

当時、北浦と霞ヶ浦の接点である潮来は物流の中継拠点として栄え、仙台藩等の蔵屋敷が並び、人・物・情報が集まる場所となっていた。

忠敬の後妻ノブは仙台藩医桑原隆朝の娘である。伊能測量の責任者であった堀田撰津守正敦は仙台藩主伊達宗村の八男である。忠敬は義父桑原隆朝を介して情報を得ていたと容易に推測できる。

伊能測量を可能にした経済力、桑原氏との出会い、忠敬の高橋至時への弟子入り等、すべてが利根川の水運による人脈・情報・経済力あつてのことである。「利根川の水運は伊能測量の隠れたバックボーン」と云えないだろうか。（M）



昭和初期の潮来風情
(上) さっぱ舟、(下) 神宮橋
撮影：飯笹義信 氏

伊能忠敬周辺の女性の手紙

— 小島一仁先生古文書講座の史料から —

加藤時男

先年、伊能忠敬の研究者小島一仁先生が逝去されました。先生の学恩をうけ、古文書解読の御指導をいただいた一人として、御冥福をお祈りします。最近、当時のテキストを改めて読み直し、その史料の貴重さと先生の御指導のレベルに驚いております。そこで、当時の古文書勉強会の一端を紹介したいと思い、筆を執りました。

佐原の古文書研究会がいつ頃から始まったのかは、途中からしかも他地域から参加した私には判然としないが、私が参加したのは昭和五十年代であった。当時、先生の住寺佐原の浄国寺を会場にして、伊能忠敬記念館の所蔵する諸史料をテキストに佐原の方々十人前後が参加されていた。当時のことを覚えていらっしゃる方がおられたら、是非紹介していただきたい。

当時、私は成東高校の社会科教師として勤務しており、小島先生には同業の大先輩としても指導をうけておりました。その頃、古文書を勉強しはじめた私は、佐原で小島先生が古文書の勉強会を開いているとの情報を松尾町の北田昌一氏から得て、同僚の塚本庸先生、川島秀臣氏を誘い、早速に参加することになりました。

勉強会は、先生の指導により輪読会形式で忠敬周辺の人々の日記や手紙を読んで行きました。最初は地元の方々がスラスラ読んで行くので怖気づいたりしましたが、何とか我慢しているうちによ

うやくついでに行けるようになり、勉強会のある土曜日は授業が終わるのを待ちかねながら、成東から佐原まで川島氏の運転で参加するのが楽しみとなってきました。

勉強会では伊能豊秋の日記をはじめ、忠敬の妻ミチ、娘イネの手紙など女性の手紙も多くとりあげられました。

それらは現在では一括して国宝指定となっているのでしたが、当時は小島先生が調査をされ、勉強会でもとりあげられました。

本誌『伊能忠敬研究』第八号（一九九六年六月）には、「伊能忠敬の妻・ミチの手紙」として小島先生により発見された十通のミチの手紙のことが紹介されている。そのうちの一通は影印も紹介している。

ここではその一部を当時のテキスト（コピー文書）により紹介。現在では簡単に披見出来ないであろうし、その筆蹟など雰囲気味わって貰いたい。

① 伊能ミチの手紙

— 三郎右衛門（忠敬）あて —

左原村御けん見の事も
 一筆申あけまいらせ候
 相かない候てないけん見まいらせ候、こん月
 十六日出の御文今日
 廿日江戸御たちのよし
 見まいらせ候ところ
 今日承りまいらせ候、鳥渡
 十四日より御風ちや
 御しらせあけまいらせ候、めて度以上
 事に御ちひやう

のたんおこり
 さそく御なん
 き遊され候ハんと
 さつしまいらせ候、今日
 お才さま御咄二て
 うけ給り候へば
 御とうふんの事と
 承り候へとも御
 ようす見まいらせ候迄
 申さす候まゝ
 候よふにねかいまいらせ候
 御はゝかりながら
 あさぶ御しんそうさま
 文ましによろしく
 仰上らせ可被下候
 なにとそくはよう
 御かへりねかいまいらせ候
 あらゝ御めもしの
 ふしと申残しまいらせ候
 めて度かくし

かへすくもついふんく御ほう
 よう遊されはやく御
 かへりねかいまいらせ候
 便りにまかせ
 一左原村御けん見の事も
 一筆申あけまいらせ候
 相かない候てないけん見まいらせ候、こん月
 十六日出の御文今日
 廿日江戸御たちのよし
 見まいらせ候ところ
 今日承りまいらせ候、鳥渡
 十四日より御風ちや
 御しらせあけまいらせ候、めて度以上
 事に御ちひやう

のたんおこり
 さそく御なん
 き遊され候ハんと
 さつしまいらせ候、今日
 お才さま御咄二て
 うけ給り候へば
 御とうふんの事と
 承り候へとも御
 ようす見まいらせ候迄
 申さす候まゝ
 候よふにねかいまいらせ候
 御はゝかりながら
 あさぶ御しんそうさま
 文ましによろしく
 仰上らせ可被下候
 なにとそくはよう
 御かへりねかいまいらせ候
 あらゝ御めもしの
 ふしと申残しまいらせ候
 めて度かくし
 おつて申あけまいらせ候、中村おていとの
 事此間事さんいたしまいらせ候
 母子共にそく才ニひたちまいらせ候
 御しらせまいらせ候、以上
 いのふ
 三郎右衛門さま
 申給へ
 ミチふ

候ハんと御嬉しく

可被下候、めて度以上
そんしまいらせ候、此方

ミナ／＼きけんよく

おりまいらせ候まゝ

御あんし被下ましく候

此間しつねんいたし候

いねぢはんの半多り御とゝのへ被下可申候

一本もみの半多り壺つ

是ハはしきれ二ても宜しく候

一あさき小もん切京四郎分

此間のちりめんの身ころへつけ候袖に御座候

七尺八寸

右ぢはんの袖御座なく候

ゆへ申遣し候

一なかぬきそうり二足

鉄之介さしかさ壺本

右之しな御せわさま

おつて申あけまいらせ候

鉄之介うば子供当年

帯ときのよし承り候

御せわさまなから御とゝのへ可被下候

鉄之介かたへの祝儀ものハ

おなんとのきぬのもん付

すそもよくおもてはかり

参り候、又うばさと

よりハひよこしま壺反

参り候、むかうより

参り候もの申あけ

まいらせ候まゝこれにて

御かんへん被成御とゝのへ

可被下候

いのふ

三郎右衛門さま

申給へ

美ち

ふ

佐原の名家伊能家に入婿した忠敬と家付娘の妻ミチとの関係については、忠敬の肩身の狭い立場を示す伝承も一部にあるが、この手紙には子供のイネ、鉄之介（景敬）をあいだに忠敬、ミチの暖かい夫婦関係がうかがえるのでなからうか。

なお、勉強会のテキストとして、かなり長く続いた「伊能豊秋日記」は諸方面で活用されているが、小島先生が『伊能忠敬研究』の十九号から二十二号にかけて、「伊能古文書教室 伊能豊秋日記1〜4」として連載している。日記の中には特殊な記事として、日々の気象を克明に記録しており、地震関係の記事も多い。東京大学地震研究所名誉教授宇佐美龍夫先生の編集による「日本の歴史地震史料」（刊行続行中）にも採録されていることを紹介しておく。



伊能隊と飲酒

忠敬は酒蔵を業としていたが、伊能隊は禁酒だった。酒飲みは隊員に採用しないと公言している。

宿舎に着いて晴れていれば天測の用意をし、測る星の数は多ければ二・三十個だった。風呂に入り食事は明るい内にとつて、星の出るのを待つ。観測に二・三時間かかるから、天測班の作業終了は九時から一〇時。酒を飲んでいいる時間は実際になかった。

室内作業班はデータの整理。できれば当日分の測量下図まで仕上げたかったがとても無理だったらしい。天測の終わりが作業の終了。夜食が出て終わりという記述が多い。残業を前提に日課が組まれていた。雨降りは全員室内作業。

そして翌日は夜明けとともに、測量現場に着いて作業開始しなければならぬ。それが遅れると、一日中忠敬の機嫌が悪かったという。

酒に関する記述は地元史料に結構現れる。禁酒というから出さなかったら催促されたとか。下郎（従者）が寝酒を所望したので、金を受取り、有合わせの肴を出したという記事は良く出てくる。寝る前に一杯、というやつである。

しかし此の日課では息がつまりそうに思う。息抜きはないのか？ 測量日記をたどってゆくと逗留という二泊する場所がある。大体一〇日に一度くらい、必ず賑やかな町である。山の中の逗留はない。これは休日だったろう。

遊びにゆきたいものは行く。飲みたいものは飲む。恐らく次の逗留地を知らされ、楽しみに声を掛け合って、毎日頑張ったのではないか。（W）

忠敬談話室

山武歳時記(二)

― 九十九里田中荒生で復活した ―

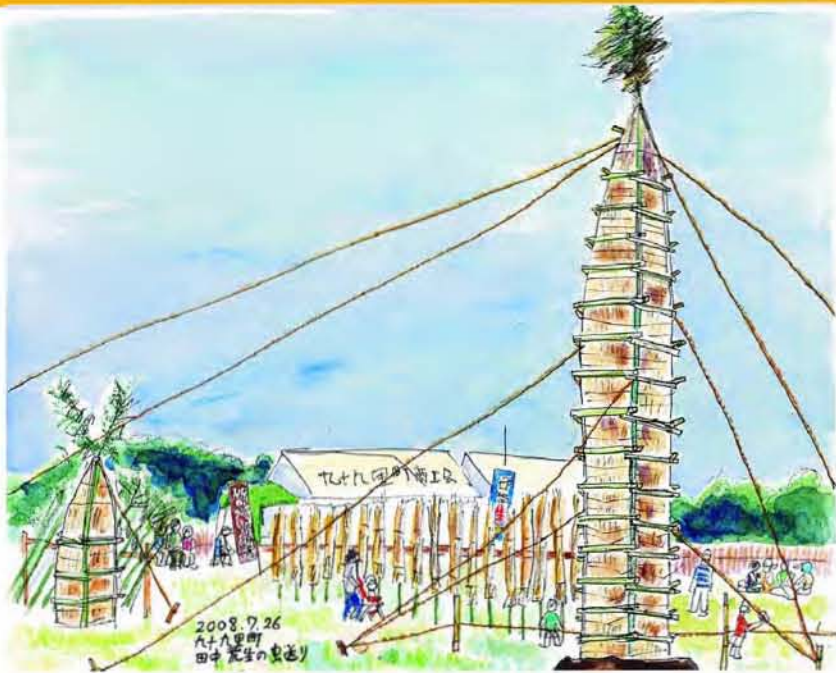
「虫送り」 江口俊子



平成二十年七月二十六日、千葉県山武郡九十九里町田中荒生の部落(五十二戸)で、虫送りの行事があると聞き行ってみました。ちなみに、田中荒生の隣の地区が、伊能忠敬の生誕地小関です。

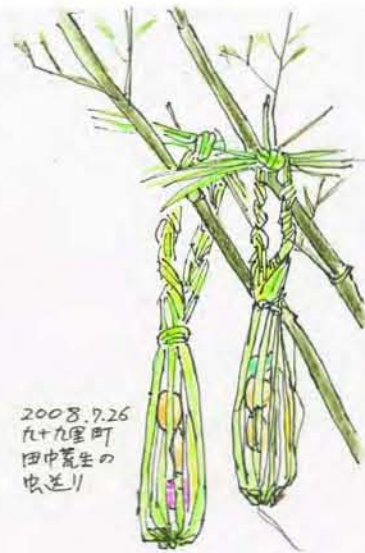
虫送りは、稲の穂が実り始めた頃、夜、タイマツを持った子供達が、田の畔道を回り、おびき寄せた虫を、麦藁で作ったやぐらに導いて火を付けて、害虫駆除した行事です。

子供達は麦藁や竹などを農家から譲り受け、自分達でやぐらを組み、タイマツも作りました。虫送りの行事には大人は参加せず、男子中学生がリーダーとなっていました。子供としての交渉力、チームワーク、手仕事のわざなど、子供達の力が結集してこそ虫送りができたのでしょう。



竹と麦藁で作られた大小のやぐら。タイマツも並べられてる。(大塚さんが子供の頃作られたやぐらは8mだったそうです。)

その頃の農村では、子供達も農家の一員として、立派に役だっていたと思います。昔から続いていた虫送りの行事も、東京オリンピック以降は各地で廃れてしまいました。



2008.7.26
九十九里町
田中荒生の虫送り

麦藁で作られたツトッコ。中に蒸パン、うどん、お菓子などを入れる。虫送り当日、地区の家では、子供達のためにツトッコを竹に吊るして門口に置いた。

子供の行事としての虫送りは廃れましたが、昔を懐かしみ、虫送りを復活させたのが、九十九里町田中荒生地区の大塚徳郎さんを中心とした田中交遊倶楽部です。平成二十年はその四回目でした。虫送りの当日、まず目にしたのは、十五メートルのやぐらです。どこか東南アジアの風景のようでした。田中荒生地区の小、中学生は六人でしたが、近在から多数の親子が参加していました。夕方六時、「九十九里黒潮太鼓」が

打ち鳴らされました。日が暮れると、タイマツを持った親子が虫送りの歌を、なんむしよおくつど

いねたち虫

さきんたたせて

よろずのおしよ おくつど

(なんの虫を送るのだ、稲につく虫を先にして、いろいろの虫を送るのだ。)

と、歌いながらまわります。タイマツの明かりを見ていると、大きな野外劇場にしているような気がしました。



2008.7.26
九十九里町
田中荒生の虫送り

15mのやぐらに火が付けられる。炎の動きが激しく、パチパチとはじける音が凄まじい。

皆が田の畔道を一周したのち、小さなやぐらから火がつけられ、最後に、十五メートルのやぐらに火が付きました。まるで赤い竜が天に舞い上がっているような、ダイナミックな焰と、威勢よく、パチパチはじける音が圧巻でした。(画は江口俊子氏)



2008.7.26
九十九里町
田中荒生の虫送り

タイマツを持った親子が虫送りの歌を歌いながら田の畔を一周し、虫を誘い寄せる。

伊能測量漫筆三

唐津藩の伊能図に関するメモ

渡辺一郎

唐津市で講演をすることになったので、唐津の伊能図にかかわる史料を調べてみた。伊能忠敬記念館蔵の伊能忠敬先生日記五冊のなかにある江戸滞在中の記録（我々は伊能忠敬江戸日記と称しているが）の中から拾ってみると次の通りである。

*

文化六年四月一二日 唐津水野和泉守家士 勘定吟味役 田口弥三郎 国図持来る。三十間堀七町目 永岡屋金兵衛案内。

唐津藩士の最初の訪問は、文化六年一月に帰着した四国測量の後だった。町人の紹介だが、勘定吟味役といえは藩では要職であろう。

四月二一日 田口弥三郎地図持来る。

どこの地図を持参したか分からないが恐らく国図ではないか。話の繋ぎと思われる。

五月一〇日 野元嘉三次（薩摩藩留守居佐役）、八つ後 田口弥三郎来る。

七月二日 田口弥三郎来る。

八月一日 田宿（ママ）弥三郎来る。

八月二五日 午後より根来喜内（小普請支配）へ出立届にゆく。

田口弥三郎来る。夜に入りて帰る。

往來の頻度は結構多い。忠敬江戸日記には用向きを書かないので分からないが、付き合いはかなり濃密になっている。

九州第一次測量には、文化六年八月二六日（陽曆1809.10.6）に出発した。濃密でなかったら、九州測量出発前日に来て、夜までいる、などということは考えられない。

餞別を届け、最後の準備をしている忠敬を手伝いながら、雑談していたのではないか。

*

文化十一年五月二五日 九州第二次測量から帰着文化十一年六月一八日 田口弥三郎来る。

文化十一年八月一四日 田口弥三郎来る。大画面5枚貸す。郁三郎、今日より来る。湯谷八十八来る。

ずっと記録は無く、二回の九州測量が終わって帰着すると、落ち着いた時期を見計らって田口弥三郎が登場する。

大画面五枚を借り出しているが、北九州の地図はまだ仕上がっていない筈だから、どんな図かは分からないが、伊能図であることは確かだろう。郁三郎は大村藩士、忠敬に入門していた。

文化十二年七月十三日 田口弥三郎より絵図帰る。今日より盆中御用休み。

約一年たって地図が返される。貸したものは必ず模写がおこなわれたと考えていいだろう。

*

九州第一次測量の旅中に郷里へ出した、お稲の勘当赦免状とともにあった手紙下書き。

大村より頼の九州画図ハ不決心二候 第一大村より曆象考成ノ写し十三四五も致損毛候 又平戸より九州之内 平戸計の図頼も有之候得共 中々以右大村金高の一倍もかかり申候又此度内々仕立候唐津図大図などよりも金五両以上を上り不申候 依之郁三郎如何様二頼候共出来不申候

ここでは、はっきりと、内々で唐津向けに地図を仕立てたと書かれている。戦災で焼かれなければどこに残っているのではなからうか。

水野家の転封先も含め、田口弥三郎をキーワードに宝探しが面白いだろう。



安倍首相 成長戦略の記者会見で

伊能忠敬に触れる

編集部

二〇一三年四月一九日、安倍首相は今後の成長戦略について記者会見をおこなったが、その際四月一九日にちなんで、伊能忠敬の蝦夷地への第一歩から語りかけられた。首相官邸のHPからダウンロードしたオフィシャル・テキストによって紹介します。

二三年前の今日、閏四月一九日、一人の男が、江戸を旅立ちました。日本最初の実測地図作成で、多くの方もご存じの伊能忠敬です。今日は、彼が、最初の地図を作るため北海道に向け出発した、記念すべき日であります。 齢、五五歳。すでに隠居していた伊能忠敬は、「人生五〇年」と言われた時代に、むしろ五〇歳から天文学を学び、測量を始めました。

一七年かけて、歩いた距離は四万km。地球一周と同じ。まさに執念の測量でした。そうして完成した地図は、その正確さに幕末にやってきた欧米人の人々も驚いたほどであった、と言います。いかに困難と考える課題でも、あきらめない強い「意志」があれば、必ず乗り越えることができる。「行動」を起こすのに、「遅すぎる」ということはありません。伊能忠敬の偉業は、現代の私たちを勇気づけてくれます。

（政権発足からほぼ四か月） 遅れる復興、長引くデフレ、危機的な状況にある教育、傷ついた日本外交、主権への相次ぐ挑発。山積する国家的な危機に、政権発足からほぼ四か月経った今も、日々格闘しています。しかし、政治に「これだけやれば解決する」というような近道はありません。

伊能忠敬が、一步一步、歩きながら地図を作っていたように、一つひとつ、決断と実行を積み重ねていく他に、結果を出す道はありません。

遅れる復興には、復興庁が前面に出て、現場と直結する体制をつくりました。私自身、毎月、根本大臣と被災地に足を運び、現場の声を聞き、復興の妨げとなっている手続きを見直すなど、地味ですが、一つひとつ答えを出してきました。

二月にアメリカを訪問し、オバマ大統領との会談により、緊密な日米同盟の完全な復活を内外に発信することができました。・・・以下略

首相記者会見への伊能忠敬登場にはエピソードがありました。会員の友田東大名誉教授の話によると、お知り合いに安倍首相と親戚の方がおられて、その方に伊能忠敬の資料を提供され、それが首相官邸に廻ってこういうお話しになったのだそうです。ビックリしました。皆さま、各地の実力者に伊能忠敬を語っていただき、世の中の改革と経済成長に役立てましょう。

（渡辺記）

あれ？ 弯架羅針がない？

富岡八幡宮の御存じの伊能忠敬像です。二月二九日に測量行のシンボル、羅針が落ちていたのが、たまたま現場に行かれた星野代表、木谷幹事などによって発見されました。経年の劣化にいたずらが加わったのでしょうか。

八幡宮様、製作者の酒井道久先生などと木谷幹事で連絡をとり合い、三月十八日（月）十時より、制作者の酒井先生のご指導のもと、池田美術さんによる修復作業が十四時ごろ無事に終了しました。二度と外れることがないよう、前より太くしっかりととりつけられたとのことです。（編集部）



あれ？ 弯架羅針がない



修復中です



立派に修復されました

箱田良助の子孫・榎本隆充さん

編集部



榎本隆充さん（撮影：伊能 洋）

になりましたか。

A：箱田良助や伊能測量に関する記録や伝承は榎本家には全くありません。それを知ったのは昭和四三年（一九六八）に明治百年記念の行事がありました。その頃からです。その後、二〇〇九年に福山城博物館で福山の殿様だった旧華族の水野、阿部氏の子孫の方々と福山城訪問がキッカで、地元の研究者の方々とお付き合いができて、詳しく知るようになりました。

Q：そうすると、伊能忠敬研究会で、伊能家にあつた箱田良助の入門誓約書を取りあげたのと、時期的にあまり変わりませんね。研究会は一九九五年の創立です。研究会の会員だった福山の故菅波寛さんは一九八四年頃から箱田良助のことを研究発表しておられますが、御存じですか。お逢いになったことはありませんか。

A：福山でお逢いしたと思います。

Q：菅波さんが会報二七号（二〇〇一）に掲載された記事に、箱田の婿入りの持参金は五〇両だったというのがあります。伊能家の娘のお稲さんに、婿入りのお金が足りないときは立て替えて欲しいと実家からお願ひしている書状があることは承知しています。

一方、持参金は千両だったのでは？ という推測記事もありますが、それでは立て替えなどという額ではありませんので、まさかと思っていまして。

婿入りの持参金というなら、五〇両はおかし

はないでしょう。

Q：武揚さん関連の文書はどのくらい残っているのでしょうか？

A：国会図書館に約七百通、榎本家に約百通、その他各地に百数十通です。家族との通信が沢山残っています。何しろ武揚が結婚したのは慶応三年ですが、函館戦争、入獄、北海道開拓とめまぐるしい波瀾のときを送って、家族と一緒にいるのは明治十一年です。音信のため沢山の書状が交換されました。

Q：フランスで私が発見した伊能中図は、武揚さんが幕府艦隊を率いて函館に脱走する際に、幕府にあつたものを持ち出し、敗戦で、ともに戦ったフランスのブリュネ大尉らと別れるとき（ブリュネらは開城前にフランス軍艦で立ち退いた）、謝礼として渡されたかと推測しているのですが、どうお考えになりますか。（渡辺）

A：徳川昭武がパリ万博に伊能図を持っていたという話を聞いていますが。

Q：昭武が持っていた地図については資料があつて、特別仕立ての「官板実測日本地図」（伊能小図をベースに木版で刊行された）と分かつており、謹呈先もはつきりしています。

それに似た話として、ウ



インタビューに応える榎本さん

最近御入会いただいた榎本隆充（えのもと・たかみつ）さん（七八）は、伊能測量隊の内弟子筆頭だった箱田良助（のちに幕臣榎本家に婿入りして榎本円兵衛と名乗る）の次男榎本釜次郎（のちの榎本武揚）の曾孫（ひまご）にあたる。

箱田良助と榎本武揚について、榎本家に伝わる記録とか伝承が伺えるというのを考え、鈴木、伊能洋、渡辺の三人でインタビューをお願いした。

*

Q：ご先祖の榎本武揚さんのことは何歳ぐらいの頃から聞かれましたか。

A：それはもう、物心ついたときからです。

Q：武揚さんの父の榎本円兵衛が元伊能測量隊員だったことは、いつ頃、どんなキッカケでお知り



会出爵の令
子孫の令
関係者
その子孫
と卿初等
大臣と子
海軍大臣
歴代海軍
に、榎本
席した学
(集合写真)



昭和十六年十二月一日

襲爵被仰付

子爵榎本武揚家督相続人
榎本隆充

イーンの万博にも伊能図をもとに制作し出展された日本図があります。この地図は日本に戻っておらず、行方も分かっていません。ただ、この地図のイメージはわかっており伊能中図ではありません。(鈴木)

Q：伊能中図をフランスに持ってゆく接点が函館戦争位しか無いんです。目下、フランス中図の履歴は全く分かりません。品物は最上級の伊能図です。武揚に結び付くことを期待しています。(渡辺)

A：そうあるといいですね。

*

Q：榎本さんは旧子爵ですよ。随分若い時に襲爵されたと聞いています。

A：六歳のときです。学習院初等科一年でした。

理由は知りませんが、父が隠居をしたんです。六歳から榎本家の当主でした。面白い写真があります。海軍大臣関係の会合ですが、武揚は海軍卿でしたから、招かれて大臣の隣に座っています。

Q：旧華族子孫の会、霞山会は今でもありますか。実際に華族だった方はもう少ないのではないのでしょうか。

A：多分、私ぐらいのような気がします。

Q：旧華族さんの役割は何だったのでしょうか。それからお手当はあったんですか。

A：華族は皇室の藩屏ということでした。したがって職業は陸海の軍人を勧められました。軍人は多かったですね。しかし強制ではありませんから職業は自由でした。私は年齢的に兵役に関係ありませんでした。もともと、華族として爵位を持つのは当主だけで、女性と当主以外の男性は関係ありません。

Q：旧大名やお公家さん出身の華族は、お金持ちだったと思いますが、その他の方もおります。お手当の方は？

A：決まった手当はありません。ただ、爵位をいただいたとき、一時賜金がありました。子爵の場合で二万円賜まりました。明治の二万円ですから、今なら数十億でしょう。

このお金を運用すれば、余裕をもって生活できるということでした。

Q：華族さんって何家位あったのでしょうか。

A：大名、公家で五百家、明治維新以降功績で爵位を賜った家が二百家くらいです。武揚は功績華族です。

Q：榎本武揚さんは波乱万丈の人生だったとおもいますが、最後は相当リッチな方だったわけですね。

A：海軍中将でロシア公使の時は、最高位の軍人の給料とロシア在外手当などで年収八千円、総理

大臣より高給だったそうです(笑)

Q：それは凄いです。

*

Q：ところで、榎本さんはずっと学習院ですか。

A：はい。初等科、高等科、大学とずっと学習院です。

Q：以前は事業をやっておられたように伺っていますが、現在はどんなお仕事をなさっておられますか。

A：東京農大の客員教授ということで、特別講義などを担当し、また、学習院大学で生涯学習センタに講座を持っています。武蔵野大学でも教えております。

その他、先祖が開陽丸乗組だった者の子孫の会というのがあります。

Q：長時間、ありがとうございます。箱田、榎本、フランス中図に関係のありそうなお話が出ました。ぜひお知らせください。どんな、断片的なお話でも結構です。

A：函館で一緒に籠城したフランス軍人のキャップのブリュネ大尉の子孫という方が二五年くらい前に日本に見えました。

ブリュネさんは、帰国後出世してフランス陸軍ナンバー3になっているのですが、画才があったと見えて、日本のスケッチ(細密画)を沢山描いているのです。それを持って見えたのです。

Q：それは情報です。渡辺の仮説が当たっているれば、フランス伊能中図をブリュネは必ず見ている筈です。日記か伝承が残っていればいいですね。軍事顧問団長のシャノワン大尉の記録でも同じです。(渡辺)

A：今年、ブリュネの子孫に会うかも知れないので覚えておきます。

榎本武揚文書に出会う

渡辺 一郎

榎本隆充さんには入会早々ながら、東京農大の大沢学長を御紹介いただいた。その際、大沢学長から最近入手したという榎本武揚自筆の証明書をを見せていただいた。

後朋書

天野喜之助

大野喜之助

東京農大の萌芽というべき「私立育英黌」が誕生したのは、明治二十四年（1891）で、設立母体は榎本武揚が会長を務める徳川育英会だったという。維新後、困窮した旧幕臣の子弟教育が狙いだった。徳川育英会で、幹事長として榎本を補佐したのは剣術の達人伊庭想太郎である。

東京市麹町区飯田河岸
私立育英黌管理長

明治二十五年
七月十五日
子爵 榎本武揚

榎本武揚の直筆文書

榎本さんも此の種の文書は御存じないとのことだったし、内容も珍しかったので、大沢学長の御了解をいただき、別項の原文を伊藤栄子さんに解読していただき、若干の解説を試みます。

（解読文）

証明書

第拾三号

割印

天野喜之助

右ハ本黌農学生ニシテ、今般

農事為取調各地巡回可致

二付テハ、御地へ罷出候ハ、宜御教示

被下度致希望候

東京市麹町区飯田河岸

私立育英黌管理長

明治二十五年

七月十五日

子爵 榎本武揚 印

「東京農大ものがたり・秋岡伸彦」から私立育英黌について調べると、東京・飯田橋の地に、東京農大の萌芽というべき「私立育英黌」が誕生したのは、明治二十四年（1891）で、設立母体は榎本武揚が会長を務める徳川育英会だったという。維新後、困窮した旧幕臣の子弟教育が狙いだった。徳川育英会で、幹事長として榎本を補佐したのは剣術の達人伊庭想太郎である。

育英黌で榎本は管理長（理事長）に就き、黌長を務めたのは、戊辰戦争では幕府砲兵隊を率いて戦い、砲術家として知られた永持明徳だった。

証明書にある明治二十五年には、育英黌は大塚

に移転し、農業、商業、普通の3科のうち農業科だけが存続することになり、経営が多難だったことを思わせる。この証明書は飯田橋当時のものである。

一方、榎本は年表によれば、このとき外務大臣を務めており、多忙ななかで、寸暇を割いて一農学生のパールワークに証明書を写していることになる。

学生が何人いたか分からないが、大変面倒見の良い人だったような気がしてならない。文書は瑞穂町の旧家にあつたというから、先祖に天野喜之助さんという方がいて、この証明書をいただいたのではなからうか。

お知らせ

TBSのBS番組に 榎本隆充さん登場

六月二二日放映のTBSのBS歴史番組「黒田清隆と榎本武揚」に榎本さんが登場します。二二時から二三時の一時間番組で、録画を終わっています。高橋英樹が司会で、武揚側が隆充さん、清隆側は竜門さんだそうです。

この番組は親しい歴史上の有名人同志のバトルという触れ込みですが、清隆と武揚は始めは戦いますが、人材を惜しんで、黒田清隆が助命に奔走します。子孫の隆充さんがどう武揚（伊能隊員・箱田良助の次男）を語るかお楽しみください。

この筆法でゆくと、高橋至時と伊能忠敬もいいかも知れません。

会報68号の「先触れ」の写しに

誤記を発見より

伊藤栄子

新潟県立文書館で保管されていた富所家の文書のなかで、伊能測量隊の「先触れ」の写しの誤記を発見という山浦幸代氏の紹介された史料を読み、ひと言申し上げます。

私はいま忠敬先生の測量日誌の校訂を他の方々と共に手伝わせて頂いておりますが、この測量日誌を書かれた忠敬先生でさえも、ごく稀に誤記や脱字はあります。あの長い旅の忙しい中、克明に書かれた膨大な記録ですから。ましてや村方文書等の中に間違いがあっても、特別珍しい事ではありません。

ひと区切りの文の中に誤字があった時、全体の文意を損なう程でなく、又本来の字が容易に分かる場合は、読む方も理解していたのではないでしょうか。右筆が記したような公的書類はさすがに誤りを見ません

が、一般の人々の手による文書の中には少々の写し違いはよくある事で、紙は貴重品でしたから別紙に書き直すことはありませんでした。この史料の中で、測量が淵量とあり、写し違いの字の方が難しい字というのも面白いです。古文書を解読していく上で誤字を発見するには、ある程度の力が必要で、昔の文書の誤字を見つけるのも勉強の一方法でしょう。

解説文

天文方 高橋作左衛文弟子

伊勢勘解由

五

右ハ測量御用の為め、北国筋へ指し遣わされ候ニ付き、陸奥国三馬屋より西の方海辺ニ添い、出羽、越後国浦々罷り通り、淵量^マいたし候間、指し問え^{つか}これ無き様致すべき旨、堀田摂津守仰せ聞かれ候 右ハ御領分も御座候ニ付き、此段其の筋の御役人中へ御通達これ有る様ニ存じ候

享和二戌年六月

右御書付御渡し成され候写し相廻し候間、御順達成さるべく候 以上

*成らるべく、成さるべく…どちらも使いますが、私は今の会話に近い方を用います。

「伊能図大全」の刊行決定

伊能忠敬に関するHPの運営や、伊能測量日記DVDの頒布などをおこなっているイノペディアでは、かねてから、完全復元伊能図フロア展用伊能図データを利用して、伊能大図・中図・小図をすべて収載した「伊能図大全」の制作を検討していました。このほど河出書房新社から、次の要領で刊行されることになりました。

書名	伊能図大全（仮称）
発売開始	二〇一三年六月
刊行	二〇一三年十一月
構成	A4版全7冊、化粧箱入り。
内容	第一巻 大図 東北・北海道 第二巻 大図 関東・甲信越・東海 第三巻 大図 近畿・中国・四国 第四巻 大図 九州・九州沿海図 第五巻 伊能中図・小図 第六巻 概説と図解 第七巻 地名索引 第一～第五巻 全カラー上製本。 第六・第七巻 モノ並製。
定価	一二〇、〇〇〇円
発行部数	一、〇〇〇部。発売特価も予定。
発行者	河出書房新社
監修者	渡辺一郎
編著者	イノペディア
資料提供	完全復元伊能図全国巡回フロア展 中央委員会

資料

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第六回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修 渡辺一郎

編著 井上辰男

【第五次測量】その二(和歌山城下・岡山城下) 自 文化二年八月十日 至 文化二年十二月二九日

【表中 赤色文字は改訂増補部分】

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
文化二年八月	(1805)					
十	(9・2)	和歌山城外久保町	同 和歌山市	本陣庄屋嘉市中屋九右衛門	紀ノ川口より止宿まで測る 暦局行用状相認、出す。	百三十八
十一	中食 (3)	本脇浦	同 和歌山市			百三十八
十二	(4)	同	同	一向宗西派光源寺	恒星測定	百三十八
十三	中食 (5)	小嶋浦	大阪府岬町		沖ノ嶋、地ノ嶋、二嶋を測る	百三十八
十四	(6)	同	同 岬町	庄屋戸口市左衛門		百三十八
十五	(7)	尾崎村	同 阪南町	西本願寺加け所御房	大雨逗留、恒星測定	百三十八
十六	(8)	岸和田城下北ノ浜	同 岸和田市	春木屋吉蔵	恒星測定	百三十七
十七	中食 (9)	高石南村	同 高石市			百三十五
		堺町	同 堺市堺区		恒星測定	百三十五
		今宮村	同 大阪市西成区		住吉宮参詣	百三十五
十八	(10)	大坂斎藤町	同 大阪市西成区 江戸堀一丁目 船町の南	旅宿	間清市郎へ書状を遣す。 無程、間清市郎来る。	百三十五
十九	(11)	同	同			
二十	(12)	同	同		恒星測定	
二十一	(13)	同	同		坂部貞兵衛奉行所へ町内測量の届に出る。 暦局へ大坂着状を出す。	
二十二	(14)	同	同		逗留測(千嶋新田より天満北野口迄測る)	百三十五
二十三	(15)	同	同		逗留測(長町より京橋片町、野田町外迄測る。)	百三十五
二十四	(16)	同	同		浄春寺の麻田剛立の碑へ参詣。	
二十五	(17)	同	同		測量の為に忠敬、高橋、 坂部、平山、同道にて間氏宅へ行	
二十六	中食 (18)	春日出新田	同 大阪市此花区 春日出南二丁目	会所(泉州食次郎右衛門下屋敷)	逗留測(尼ヶ崎領初嶋より恩貴新田) 逗留測(千嶋新田より恩貴新田)	百三十五
		大坂斎藤町	同			百三十五

二七	(19)	同	同	同	間清市郎宅へ行山々を測 恒星測定	
二八	(20)	同	同	同	曆局行書状、間氏へ頼て飛脚へ出す。	
二九	(21)	同	同	同	市野金助病氣に付帰府 門屋清治、小者三治出立	
三十	(22)	守口宿	同 守口市	本陣松屋八兵衛		百三十五
文化二年閏八月 (1805)						
一	(9, 23)	枚方宿	大阪府枚方市	本陣池尻善兵衛		百三十三
二	(24)	橋本町	京都府八幡市	伏見屋新七		百三十三
三	(25)	淀城下池上町	同 京都市伏見区	河内屋市郎兵衛 糺屋甚右衛門		百三十三
四	(26)	下鳥羽村	同 京都市伏見区	小笹忠治郎 大沢又左衛門		百三十三
五	(27) 中食	柳原村 京都神泉苑町	同 京都市上京区 同 京都市中京区	若狭屋太郎兵衛		百三十三 百三十三
六	(28)	同	同	同	坂部、京都町中測量書付、外に御証文写三通持参、 東町奉行所へ出る	
七	(29)	同	同	同	永沢、西門跡庄藤一見。曆局行書状を出す。	
八	(30) 中食	上鳥羽村 京都神泉苑町	同 京都市南区 同 京都市中京区	若狭屋太郎兵衛	神泉苑町より初改曆所跡それより嶋原後を四ツ塚迄 測。	百三十三
九	(10, 1)	同	同	同	藤森稻荷、伏見稻荷へ立寄。恒星測定	百三十三
十	(2)	同	同	同	逗留測、忠敬少し不快にて休息。曆局へ書状を小堀役 所よりの江戸幸便に頼。	百三十三
十一	(3)	同	同	同	禁裏拝見に、一同禁裏付 小嶋安芸守役所へ罷越、 家来中案内にて御所の内少々拝覽	
十二	(4)	同	同	同	高橋外3名、愛宕参拝	
十三	(5)	大津宿	滋賀県大津市	本陣大塚嘉右衛門	東西町奉行へ届に越。町奉行所へ曆局行書状を頼置。	百三十三
十四	(6) 中食	西ノ条村 瀬田橋本村	同 大津市	浄土宗竜光山雲住寺	恒星測定	百三十三 百三十三
十五	(7)	志那村	同 草津市	浄土宗宗源寺	北山田村大庄屋木内兵四郎へ立寄、名石、奇石数品 を見る。	百三十三
十六	(8)	同	同	同	雨天逗留	

十七	(9)	木ノ浜村	同	守山市	東本願寺末光照寺	恒星測定	百二十五
十八	(10)	吉川村	同	野洲市	百姓藤四郎 清三郎	恒星測定	百二十五
十九	(11)	野村	同	近江八幡市	西本願寺末西福寺	平山・佐藤は亀画図を成	百二十五
二十	(12)	八幡町	同	近江八幡市	馬淵屋金右衛門	山上にて恒星測定	百二十五
二十一	(13)	長命寺	同	近江八幡市	長命寺観音御供所	沖ノ嶋を測。平山は長命山上に登眺望図を成。	百二十五
二十二	(14)	同	同		同	恒星測定	百二十五
二十三	(15)	丸山村	同	近江八幡市	八郎兵衛	恒星測定	百二十五
二十四	(16)	八幡町	同	近江八幡市	馬淵屋金右衛門	忠敬残居て推歩を成	百二十五
二十五	(17)	常楽寺村	同	安土町	荷物問屋石馬治郎	忠敬当村に来て推歩を成	百二十五
二十六	(18)	伊庭村	同	東近江市	西本願寺末 恵日山妙楽寺	恒星測定	百二十五
二十七	(19)	薩摩村	同	彦根市	西本願寺末善照寺	忠敬薩摩村に至推算す	百二十五
二十八	(20)	同	同		同	忠敬外二名、乗船多景嶋へ渡り測る	百二十五
二十九	(21)	同	同		同	曇天風に付逗留。推算	
一	(10.22)	甘呂村	滋賀県彦根市	辻伝左衛門	忠敬外二名、荒神山に登て南端北端両所にて山嶋を測。 旦、亀画図を認	恒星測定	百二十五
二	(23)	彦根城下伝馬町	彦根市	彦根城下伝馬町	彦根候、鷹野に小休のよし。	彦根候より、忠敬・高橋へ金三百疋宛、坂部へ金二百疋目録被贈下。	百二十五
三	(24)	同	同	同	彦根候より、忠敬・高橋へ金三百疋宛、坂部へ金二百疋目録被贈下。	妙法山蓮花寺本堂の前、恒星測定	百二十五
四	(25)	米原宿	米原市	問屋源十郎	当町より中山道鳥居本宿迄以後の繫測を成す。	針摺峠へ行山嶋を測。	百二十五
五	中食	長浜町	長浜市	年寄吉川三左衛門	恒星測定	恒星測定	百二十五
六	(27)	八木浜村	長浜市	市右衛門	恒星測定	恒星測定	百二十五
七	(28)	同	同	同	竹生嶋に渡り周囲を測	恒星測定	百二十一

二四	(14)	大石淀村	同 大津市	大庄屋正田万蔵	忠敬外七名、石山に登て山嶋を測。平山、川向の山に登て龜図を成。大石郷中村は大石内蔵助良雄の祖父出生の所、内蔵助も浪人中此村にも住居せしよし。	百三十三
二三	(13)	寺辺村(石山寺門前)	同 大津市	八幡屋佐兵衛		百三十三
二二	(12)	同	同		逗留、曆局行書状認	
二一	(11)	大津宿	同 大津市	有川喜右衛門	忠敬外四名、えい山に登て山々測をとす。曇晴不測 下川辺政五郎、小者榮治着	百三十三
二十	(10)	下坂本村	同 大津市	日蓮宗光長山蓮聖寺	平山・佐藤は未明に比えい山四明ヶ岳へ登て山々を測。坂部外二名あとより登山して一同に測。曆局より用状相届。恒星測定。	百三十三
十九	(9)	下坂本村 本堅田	同 大津市		平山・佐藤止宿 高橋外四名、乗船して直に本堅田へ至て。推算 恒星測定	百二十六
十八	(8)	南浜村	同 大津市	西本願寺末慶音寺	高橋外四名、比良ヶ岳へ登て山々を測る。此日度々雨。仍て山々曇て不見	百二十六
十七	(7)	同	同	同	雨天逗留	
十六	(6)	南小松村	同 大津市	高島屋重治郎	恒星測定	百二十五
十五	(5)	大溝本町	同 高島市	近江屋弥右衛門 万屋十右衛門	恒星測定	百二十五
十四	(4)	舟木南浜村	同 高島市	渡太郎左衛門	忠敬外五名、今津より乗船直に舟木南浜宿に至る。推歩を成す。恒星測定	百二十五
十三	(3)	今津宿	同 高島市	塩屋八郎左衛門	忠敬外五名、海津より乗船直に今津宿に至る。推歩を成す	百二十五
十二	(2)	海津宿	同 高島市	東本願寺末 照見山福善寺	忠敬、高橋、平山休番	百二十一
十一	(11.1)	大浦浜村	同 長浜市	膳所領代官 池田助左衛門	坂部、稻生、佐藤、角二、休番。東河少し病氣止宿に至る。恒星測定	百二十一
十	(31)	塩津浜村	同 長浜市	林忠左衛門		百二十一
九	(30)	飯ノ浦村	同 長浜市	久五郎	志津ヶ岳へ登て山々を測 恒星測定	百二十一
八	(29)	津里村	同 長浜市	組頭四郎左衛門	平山は山本山に登て龜図を認。曆局御用状届 恒星測定	百二十一

文化二年十月		(1805)				
一	(11, 21)	蒲田村字高洲	大阪府大阪市淀川区 西三国2丁目17-1	渡辺市三郎	恒星測定	百三十五
二	(22)	中食 神崎川通佃村	兵庫県尼崎市		尼ヶ崎候より忠敬へ小菊紙三十帖被贈。差添三人へ小菊紙六十帖被送。一同受納	百三十五
三	(23)	同	同	同	大曇風逗留	
四	(24)	同	同	同	大曇風逗留	
五	(25)	西宮町	同 西宮市	脇本陣 小幡坪屋源兵衛	恒星測定	百三十七
六	(26)	大石村	同 神戸市灘区	魚屋善兵衛 松屋伝助	高橋外三名、摩那山に登て山嶋を測る。平山、小坂、吉平病氣。恒星測定	百三十七
七	(27)	兵庫町新在家町	同 神戸市兵庫区	網屋長右衛門	忠敬外四名、摩那山に登て山嶋を測。それより広厳寺に立寄楠子の書を一見し生田宮へ参詣し、布引滝も一覽。楠公の碑の前にて山々を測る。小坂病氣。恒星測定	百三十七
八	(28)	西須磨村	同 神戸市須磨区	西本願寺末源光寺	上野山福祥寺(須磨寺)立寄靈宝を一見す。小坂病氣。	百三十七
九	(29)	明石大倉谷駅	同 明石市	広瀬利兵衛	恒星測定	百三十七
十	(30)	同	同	同	推算地図。逗留 恒星測定	
二五	(15)	池ノ尾村	同 大津市	真言宗神宮寺	忠敬外五名、止宿より直に池ノ尾村に至る。恒星測定	百三十三
二六	(16)	宇治	同 宇治市	美濃屋市郎兵衛	宇治川に添て宇治に至る。川辺難所景色よし、兩岸悉高山岩石なり。	百三十三
二七	(17)	同	同	同	雨天逗留	
二八	(18)	伏見南浜町	同 京都市伏見区	丹波屋仁兵衛	同所逗留にて大池を測。恒星測定。 曆局書状届。	百三十三
二九	(19)	同	同	同	伏見町中繫測所を測。御奉行所へ出立届を致し夜出立。乗船下鳥飼村へ着。	百三十三
三十	(20)	下鳥飼村	大阪府摂津市		立。乗船下鳥飼村へ着。	百三十五

十一	(12.1)	西島村	同	明石市	真言宗塗香山極楽寺	坂部外五名、直に西嶋村に至て地図推算を成。松江村より東嶋村の間を屏風ヶ浦という。	百三十七
十二	(2)	高砂町北本町	同	高砂市	原喜三右衛門	別府村手枕の松一覽す、奇松也。尾上へ立寄、古鐘並相生の小松を一覽し高砂町へ着。直に牛頭大王の社内の相生の新松を一見す。恒星測定	百四十一
十三	(3)	同	同		同	逗留測。双方測終て一同に石宝殿へ立寄山上へ登り山嶋並び近隣の村々を測。	百四十一
十四	小休 (4)	大塩村 的形村	同	姫路市	十郎右衛門	的形村、曾称天満宮参詣	百四十一
十五	(5)	飾万津町	同	姫路市	大年寄三木太一郎	恒星測定	百四十一
十六	(6)	姫路城下堅町	同	姫路市	本陣三木与惣五郎	恒星測定	百四十一
十七	(7)	余子浜村	同	姫路市	池田屋弥市兵衛	忠敬外七名無測にて余子浜村に至る。此朝曆局へ用狀一封当領主幸便を頼。恒星測定	百四十一
十八	(8)	室津	同	たつの市	薩摩屋孫九郎	恒星測定	百四十一
十九	(9)	(家嶋)	同	姫路市	大庄屋高島加作	姫路馳走船にて家嶋へ渡海。恒星測定	百四十一
二十	(10)	同	同		同	家嶋、男鹿嶋、院下嶋、太嶋を測。恒星測定	百四十一
二十一	(11)	同	同		同	西の嶋、坊勢嶋、小松嶋、黒嶋を測	百四十五
二十二	(12)	同	同		同	西の嶋、坊勢嶋、大松嶋、長嶋を測	百四十一
二十三	(13)	室津	同	たつの市	薩摩屋孫九郎	下河辺外五名、高嶋を測 忠敬外五名、家嶋遠見番所へ上て山嶋を測。姫路馳走船にて室津へ帰着	百四十一
二十四	(14)	同	同		同	忠敬外二名、燈明堂にて山嶋を測	百四十一
二十五	(15)	相生浦	同	相生市	中庄屋 海老名半左衛門	恒星測定	百四十一
二十六	(16)	坂越浦	同	赤穂市	奥藤三郎左衛門		百四十四
二十七	(17)	同	同		同	大曇天逗留。赤穂義士より止宿奥藤助兵衛へ送る真跡数通、並岡野金右衛門より母に送る真跡を一覽す。	
二十八	(18)	新浜浦	同	赤穂市	勘右衛門	取上嶋、唐舟嶋を測。恒星測定。間清市郎より飛脚来る。	百四十五
二十九	(19)	加里屋城下 加里屋町二丁目	同	赤穂市	一向宗東派万福寺	地図推算を成。恒星測定	百四十五
三十	(20)	同	同		同		

一	中食 (12.21)	福浦村	兵庫県赤穂市	長安与三右衛門	恒星測定	百四十五
二	(22)	日生村	岡山県備前市	藤兵衛 本家与左衛門	恒星測定	百四十五
三	(23)	(大多府嶋)	同 備前市	幸吉 政七 沢五郎	測量三手分にて鹿久居嶋を測る。	百四十五
四	(24)	日生村	同 備前市	藤兵衛	三手分測。曾嶋、鴻嶋、大多府嶋、頭嶋を測る	百四十五
五	(25)	難田村	同 備前市	百姓三郎兵衛 伊助	三手分。クチナシ嶋を測る	百四十五
六	(26)	片上駅	同 備前市	本陣小国六郎左衛門	三手分測。恒星測定	百四十五
七	(27)	虫明村	同 瀬戸内市	升屋利平治	坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る曆局用状致着	百四十五
八	(28)	同	同	同	忠敬、坂部病氣。同所逗留。長嶋残半周を測る。団 嶋、喜嶋を測。恒星測定	百四十五
九	(29)	尻海村	同 瀬戸内市	神坂屋幸吉	大嶋、弁天嶋を測。恒星測定	百四十五
十	(30)	牛窓湊東町	同 瀬戸内市	中崎屋初右衛門	前嶋、大嶋等測る 恒星測定	百四十五
十一	(31)	同	同	同	同	百四十五
十二	(1806.1.1)	東片岡村字宝伝	同 岡山市東区	伝治郎 嘉三郎 吉治郎	同	百四十五
十三	(2)	南幸田村	同 岡山市東区	磯屋太平	犬嶋等を測。恒星測定	百四十五
十四	中食 (3)	乙子村	同 岡山市東区	坂口屋松左衛門	坂部、平山、吉平病氣	百四十五
十五	中食 (4)	九幡村	同 岡山市東区	射越屋紋八	同	百四十五
十六	(5)	一番村	同 岡山市中区	安太夫	曆局へ用状を出す。吉平病氣、昼頃より雪降風、山々 雪と成。恒星測定	百四十五
十七	中食 (6)	米倉村	同 岡山市南区	和右衛門	恒星測定。高橋、吉平病氣	百四十五
十八	(7)	瀬尾村	同 岡山市南区	八浜屋喜右衛門	同	百四十五
十九	(8)	早島沖新田村	同 早島町	庄屋片山貞蔵	恒星測定	百五十一
二十	(9)	藤戸村	同 倉敷市	真言宗 補陀落山藤戸寺	恒星測定	百五十一

[illegible]

二九	(17)	岡山城下下之町	岡山県岡山市北区 表町二丁目	脇本陣福岡屋吉郎平衛		
二八	(16)	同	同	同		
二七	(15)	同	同	同	午中太陽測定と恒星測定	
二六	(14)	同	同	同	午中太陽測定と恒星測定	
二五	(13)	同	同	同	午中太陽測定と恒星測定	
二四	(12)	同	同	同	午中太陽測定と恒星測定	
二三	(11)	同	同	同		
二二	(10)	同	同	同	午中太陽測定	
二一	(9)	同	同	同	午中太陽測定と恒星測定	
二十	(8)	岡山城下下之町	岡山県岡山市北区 表町二丁目	脇本陣福岡屋吉郎平衛	積雪三寸斗、近年の大雪 間清市郎へ用状を出す	
十九	(7)	同	同	同	午中太陽測定	
十八	(6)	同	同	同	午中太陽測定と恒星測定	
十七	(5)	同	同	同	間清市郎へ宿送用状を出す	
十六	(4)	同	同	同	忠敬痰発引簞	
十五	(3)	同	同	同	暦局行書状認夜分渡	
十四	(2)	同	同	同		
十三	(2. 1)	同	同	同		
十二	(31)	同	同	同		
十一	(30)	同	同	同		
十	(29)	岡山城下下之町	岡山県岡山市北区 表町二丁目	脇本陣福岡屋吉郎平衛	午中太陽測定	
九	(28)	同	同	同	午中太陽測定と恒星測定	
八	(27)	同	同	同	午中太陽測定と恒星測定	

伊能忠敬墓前祭行われる

去る平成二五年五月十七日、伊能家菩提寺、牧野山「観福寺」に於いて、仮称「忠敬墓前祭」を行われる会」による墓前祭が行われました。

これまで墓前祭は伊能忠敬翁の命日にあたる新暦五月十七日に香取市が行ってききましたが、理由あつて取りやめとなっていました。

「忠敬翁は地元佐原のみならず日本を代表する偉人であり、その功績を讃え後世に伝えて行くことは私達の役目ではないか」との想いから山村増代氏が発起人となり賛同者を得て「忠敬墓前祭」を行行を考える会」が発足し、今回の墓前祭となりました。

墓前祭は伊能家墓所忠敬墓石前において読経で始まり出席者全員が焼香して終了しました。

その後、本堂大広間において、本会理事で香取市議の伊能敏雄氏の進行で説明会がありました。

「忠敬墓前祭行を考える会」の発起人の山村増代氏より、「五年後の二〇一八年には忠敬没後二百年の節目を迎えます。

大震災以降途絶えていた墓前祭の再開を機に伊能忠敬先生の顕彰を関係諸団体と共に市民運動としてソフト・ハード両面から考え実行して行きたいと思ひます」との挨拶がありました。

伊能忠敬NHK大河ドラマ化推進協議会会長の木内志郎氏から聖路加国際病院名誉院長の日野原重明氏と徳川記念財団理事長の徳川恒孝氏を名誉会長にお願いしたことが報告されました。

参加者 山村増代氏・地元県議・香取市長・木内志郎氏・木内信次氏・伊能敏雄氏他地元有力者及び関係者、本会香取支部長香取禧良氏他皆様、約五十名でした。(M)

大谷大学博物館特別展「伊能忠敬の日本図」

会期

2013年6月11日(火)～8月5日(月)

※日、月休館、7月21日(日)、8月5日(月)は開館

開館時間 10時～17時

(入館は閉館時間30分前まで)

※金曜日は19時まで開館延長

会場 大谷大学博物館

京都市北区小山上総町 大谷大学内

響流館1階 電話(075-411-8483)

※市営地下鉄烏丸線「北大路」

(京都駅から15分) 6番出口すぐ

市バス「北大路バスターミナル」

「北大路駅前」「下総町」下車

観覧料 一般・大学生 500円 小中高生 無料

主な展示

国宝「伊能忠敬関係資料」(伊能忠敬記念館蔵)

「大日本沿海輿地全図」中図(イブ・ペレイ氏旧蔵・日本写真印刷蔵) ほか

講演

①日時 6月22日(土) 14時

会場 大谷大学講堂

講師 渡辺一郎氏(伊能忠敬研究会・名誉代表)

講題 「フランス伊能中図の発見から日本里帰

りまで」

②日時 7月20日(土) 14時

会場 大谷大学尋源館2F尋源講堂(予定)

講師 酒井一輔氏(伊能忠敬記念館・学芸員)

講題 「時代と伊能忠敬」(仮題)

大沼 晃さん(藤沢市)より

3月30日(土曜日)産経新聞の「忘れ難き偉人伝」に伊能忠敬の記事が掲載になりました。上・中(4月6日)・下(4月13日)の三週連続記事ゆえ、揃いましたらお送りいたします。取り急ぎお知らせ申し上げます。

(編集部)連載終了後、3回分の切り抜きを送っていただきました。産経新聞オピニオン欄に掲載されました。筆者は将口泰浩さん、タイトルは「忘れ難き偉人伝」伊能忠敬

連載(上)「人生二山」を生きた男

連載(中)ただ地球の大きさが知りたい

連載(下)第二の人生は「世のため人のため」

教育

★編集長より「お詫びと訂正」
本誌第六八号の目次で「伊能忠敬の人生」の誤り訂正してお詫びいたします。
訂正：伊能忠敬の人生(伊能忠敬研究会・名譽代表) 酒井一輔氏(伊能忠敬記念館・学芸員) 講題「時代と伊能忠敬」(仮題)

新入会員自己紹介



榎本隆充さん(東京都)

此度入会させて頂きました榎本でございます。

第七次伊能測量隊から参加し、後に内弟子筆頭となりました箱田良助「後の榎本円兵衛」の玄孫であり、円兵衛の次男、榎本武揚の曾孫に当たります。

武揚は戊辰戦争の折、箱館五稜郭に於いて、幕府海軍副総裁として最後まで薩・長と戦った事で知られておりますが、明治期には、政治家、外交官等を歴任しております。又、あまり知られておりませんが、電気学会、工業科学会、気象学会、地学協会等、の会長もしており、科学技術者としての側面も持っております。これは正に、伊能図作成に心血を注いだ父親、箱田良助の素質を受け継いだものと思っております。

世界に誇る伊能図の研究は、諸先輩の御努力により、かなり解明されているものと拝察しておりますが、今回、フランスに有った伊能中図に、武揚が関与していた可能性がある事をお聞きし、八月にパリにまいりますので、ブリュネの子孫に会い、その辺を確かめたいと思っております。

なお、私の紹介はインタビュー記事をご参照さい。

今後の、当会の発展と研究に少しでもお役に立てることがあれば、幸甚と思っております。宜しくお願い申し上げます。

山田 洋さん(唐津市)

渡辺先生の講演に感銘を受けて入会いたしました。



会員便り

— 会費納入・
総会返信などより

市川美津夫さん(長野県須坂市)

(北国街道 福島宿在住)

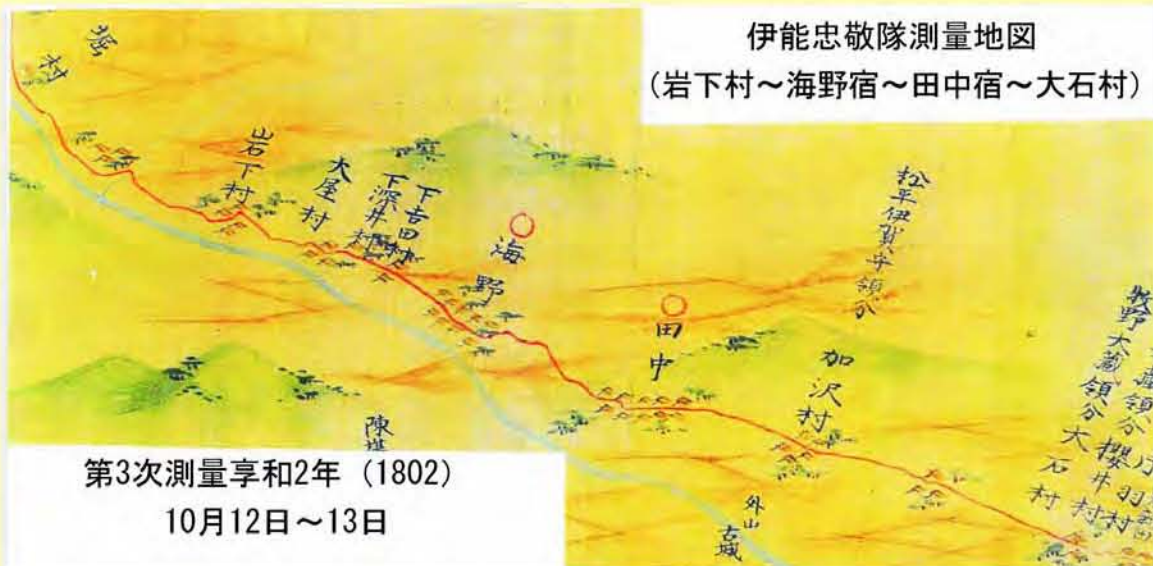
平成二五年三月二六日「東北信(信濃の国東北部の意味です)の街道を訪ねる会」のメンバー15人で伊能公が第三次測量で歩いた北国街道田中宿と海野宿付近約十二キロを歩きました。

その際、右図のような伊能公の測量図を作り、往時を偲びながら歩きました。

また海野宿では現地在住のガイドに案内していただきとても好評でした。

この会は昨年発足し、まず中山

伊能忠敬隊測量地図
(岩下村～海野宿～田中宿～大石村)



第3次測量享和2年(1802)
10月12日～13日

道と北国街道の追分の「追分宿」より「善光寺宿」を目指して歩いています。

その後、越後と信濃の国界の関川宿より北国街道を南下し「善光寺宿」まで歩く予定です。

伊能研究会員の皆様のご参加や



「東北信の街道を訪ねる会」の皆さん

御教授をよろしく願います。

伊能二三代さん(札幌市)

地域活動支援センターで所長として、仕事をさせて頂いています。大河ドラマに決まりますように、いつも北国よりお祈りしております。

河西 浩さん(甲府市)

今年もよろしく願います。

川上 清さん(水戸市)

25年3月16日(土)～17日(日)第2回水戸観梅ツアーデウォークを開催、快晴下偕楽園梅花満開にて参加480名の皆さまに喜んでいただきました。



馬場良平さん（武雄市）

『伊能忠敬測量隊肥前国測量から200年！』測量隊の足跡をたどり歩く会開催中。6月9日の研究会総会とダブリ、東京に行けないのが残念です。

岡部孝子さん（東京都足立区）

今年度は行事に参加したいです。

新沢義博さん（さいたま市）

5月より（さいたま市に）引っ越します。

高木崇世芝さん（札幌市）

拙著を紹介して頂き感謝申し上げます。

前田健之助さん（匠瑤市）

体が弱ってきました。

山浦佐智代さん（三条市）

お世話になります。

高宮 宏さん（東金市）

第65号の伊能楯雄様の「伊能三郎右衛門家墓地」史跡巡り、意義深い内容に感動いたしました。第65号の海保英之様の「海保千神家」の解説を案内に現地を訪ね、大きな石塔の数々に敬意を覚えた後だけに、伊能、平山、海保家の墓石が語る縁

の深さをはじめて知ることができました。感謝いたします。

塚本倫正さん（成田市）

（佐原）の木内信次さん、大河ドラマに向けて大活躍です。

編集の素晴らしさ、皆さんに敬服しています。

矢能 彰さん（さいたま市）

眼と両ひざを痛め、少々苦難。

県内の公民館や淑徳大学市民講座で忠敬さんのシニアからの生き方の卓話をしています。

大西道一さん（神戸市）

伊能参考図高砂の記事遅れています。申しわけありません。

堀野正勝さん（土浦市）

伊能図フロア展最終コーナーを目指し頑張っています。

西川 治さん（多摩市）

富士学会十周年記念事業、富士山頂を各地から観測した伊能先生を偲びました（2012）。

この4年余、榎本武揚の手紙を解読して頂いています。武揚の父親の生涯については、さらに研究したいものです。

井上靖子さん（所沢市）

本号から活字が大きくなり思わずすつと読みこんでしまいました。史料解説に安藤さんのお名前にし

ばしおしのび申しました。三郎右衛門の墓地もしばし偲ばせていただきました。

齋藤 仁さん（東村山市）

健康と体力づくりに努めて居ります。会報の充実ぶり、ご苦勞様です。何もお手伝いできず申し訳ありません。

山本公之さん（小平市）

忠敬が用いた望遠鏡の製作者岩橋善兵衛の大阪貝塚の善兵衛ランドに行ってきました。2月22日のこと、その内に報告いたします。

石川清一さん（福岡市）

もうしばらく公民館の仕事をきますので、時間をそちらにとられそうです。よろしく。

平川定美さん（佐世保市）

伊能碑建立の候補地を探しています。

江口俊子さん（山武市）

故伊能陽子さん、安藤由紀子さんには、私が絵を続けて描くことに、とても励まされました。今、お二人のこと、懐かしく思っております。

神保弘之さん（千葉県横芝光町）

25年3月末日をもって公務員を退職しました。

狼 芳明さん（藤沢市）

元気で働いています。

加賀尾宏一さん（篠山市）

平成26年（2014）3月24日（4月2日（新暦）が忠敬測量日記による笹山領内測量道の200年になりますので、弊社として記念事業を策定中であります。

（加賀尾さんは「伊能忠敬笹山領探索の会」会長をつとめておられます）
城野幹文さん（嬉野市）

いつもお世話さまです。何も協力できなくて申し訳ありません。今後ともよろしく願います。

白根貞夫さん（横須賀市）

間もなく九十路となる所、妻なく一人で暮らし、日々の糧づくりに追われています。幼年期から鉄道が好きだったので、先般日本鉄道漫談の講演をしました。諸兄姉の御健勝を祈ります。

村上昭三さん（船橋市）

その後も体調が余り良くなく、会合に出席出来なく、残念に思っています。会報は楽しく読ませてもらっています。不一

友田修司さん（東京都杉並区）

先刻、私の従兄の縁戚を通じて政府に伊能忠敬の資料を届け偉人伝を伝えておきました。

上田勝俊さん（鳥取市）

新しい仕事について苦勞しています。

提案 何か全国駅伝リレーなどはどうですか。やはり地方の皆さまが参加出来ることをイベントとして企画・開催して下さい。

川尻達子さん（香取市）

3月末に香取市役所を定年退職いたしました。今年2月の東総歩こう会（銚子市・旭市・香取市・匝瑳市・香取郡・山武郡の地域）の総会において会長に就任いたしました。毎日歩こう会関係の書類作成に奮闘しております。

塚本倫正さん（成田市）

機関誌の発刊を楽しみにしています。

高校生、PTAで講演のさいは、いつも忠敬の生き方についてはなしています。

事務局のみなさんのご苦労に感謝しています。

星塾さんの「伊能忠敬」の本読んでいます。

原田照男さん（神戸市）

最近右膝の蝶番を取替えました。順調に回復しています。

石川清一さん（福岡市）

この4月1日から福岡市公民館長2期目（2年間）に入ったところで、年間3万人近くの利用があり、意外にいそがしく、九州支部の活動にも時間がとれず申し訳なく思っています。

います。

秋間 実さん（逗子市）

85歳 まだ生きのびています
諸兄姉との再会を楽しみにでかけます。

安川義巳さん（旭川市）

春に小雪が舞って困惑しています。
南国の桜の風景がうらやましいです。
佐原はじめ各地の震災復興を願っています。総会が盛会でありますように。

久保木恒雄（柏市）

壮健也。

松田昭二さん（京丹後市）

老齢により欠席いたします。研究会の発展をお祈りします。

三木敏明さん（姫路市）

お世話になりありがとうございます。

木谷道宣さん（小平市）

伊能図フロア展の来年の展開について下交渉を始めております。ぜひ47都道府県での開催を！

山浦佐智代さん（三条市）

久しぶりに参加させていただきました。す。よろしく願います。

山本公之さん（小平市）

在京の有志に限らないが、どこかで例会（題名のない懇談の集まり）が欲しい。お互いの会員の顔が見えないので、思い付きですが希望します。

ます。

神保弘之さん（横芝光町）

3月末をもちまして、公務員を定年退職しました。これからは、自由な時間を楽しみたいと思っています。
清水靖夫さん（新宿区）
お世話さまです。宜しく願上げます。

河西 浩さん（甲府市）
皆様によりしくお伝え下さい。香取市長さんの講演記録を会報でお知らせください。

高宮 宏さん（東金市）

東金市神社総代会理事のため、5月は総会、上野国立博物館での大神社展見学、三峯神社参拝、6月は山武市総会、白山神社参拝等々が予定されております。

藤原 繁さん（神戸市）

いつもお世話になり、深謝いたします。

岡部孝子さん（足立区）

ご連絡ありがとうございます。当日は他の予定が入っており、出席できません。宜しくお願い致します。

赤木三郎さん（鳥取市）

体調を崩していましたが、もう少しで元気になります。盛会をお祈りしております。

宮地 滋さん（伊万里市）

伊能測量隊2000年、平成24年9月15日～10月8日伊万里市にて伊能展、11月1日～11月30日有田町にて伊能展開催。（ミニミニ伊能展）

伊能忠敬研究会に入会できたことを幸と思っております。

城野幹文さん（嬉野市）

いつもお世話さまです。今年は沖縄会議と重なってしまい、申し訳ありません。会の益々の繁栄を祈念致します。

先日、渡辺先生と武雄（佐賀県）市で、お会い出来ました。皆さまにもよりしくお伝え下さい。

伊藤栄子さん（練馬区）
脊椎手術の為入院しますので失礼いたします。御盛会を祈っております。

石井友夫さん（横浜市）
よりしくお願いいたします。

垣見壮一さん（新潟市）
素晴らしい会誌楽しみです。ご努力に敬意を表します。



『伊能忠敬研究』投稿要領

①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

*刷り上がり一頁に入る文字数は約3000字（704字×3段または800字×4段）です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

②原稿のかたち

・本文（テキスト） 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的なJIS形式またはEPSまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

*印刷サイズが100mm×75mmと350ppiのカラー写真の場合、100前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによって2Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真は無理な場合があります。

わからない場合はL判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキヤナで撮った電子ファイル（JPGフォーマット）にしてください。カラー数の少ない図はGIF形式のフォーマットでもかまいません。

③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷上り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくは本誌六七号および六八号を参照）

送り先

・電子メール添付の場合 inohken_kaishi@koalaneet.ne.jp

・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項

- ・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。
- ・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取っておいってください。
- ・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。
- ・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。
- ・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。

伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方にはどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年四回発行

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地

〒153-0042

東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F

伊能忠敬研究会

電話・FAX 03-3466-6752

事務局メール inohken@ae.aunet-net.jp

郵便振替口座 001400104118610

伊能忠敬研究会関係ホームページ

○「Inopedia（イノペディア）」伊能忠敬と伊能図の大事典

http://www.inopedia.jp/

○「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧 アメリカ伊能大図など地図および史料

http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/

○「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料

http://www.tt.rim.or.jp/~koko

編集後記

◇本号は少し薄めですが、掲載された記事はかなり多彩で濃い内容となりました。地図作りの業績もさることながら、人間忠敬の生き方が少しずつ明らかになってきて、これまで以上に親しみをもって忠敬先生とその時代に思いを巡らすことが出来るようになってきたのではないのでしょうか。◇さて、今回もまた、編集部のMさんに大奮闘していただいた本号ができました。編集作業にはかなりまとまった時間と集中力が必要です。こうした条件が何とか確保出来そうなど年組三人が持ち回りで作業していますが、年間四号の発行を維持していくためには、元気のよい（若い）スタッフがあと二人ぐらいほしいところです。どなたか手を挙げていただけていただけるとありがたいのですが・・・作業はインターネットを通じて行いますので離れていても可能です。◇あ、また愚痴をこぼしてしまいました。忠敬先生はこの歳でもまだまだ元気に仕事をしていましたね。がんばらなくては・・・。（T）